



婦人の子供

第一卷
第二號

婦人と子ども 第一巻目次

吉田松陰の母權子の肖像

いさましい少女○鳥と子ども○影畫○猿の物真似○謎々

子どもと境遇
何故泣かなくなつたでせう
簡易料理
印度土人の家庭生活
前かけの持ちへ方
兒母界ソリダシ

獅子の術
面白き理科の實驗
日本化したる外國語

育兒學
藤田東湖の妻里子
ローランド夫人

文苑
システードミノ
車のわだち
新年の歌
雪の遊び
春山

説林
兒童訓育論
女子の職分

研究
臺灣の大談
倫理管見

女子高等師範學校教授 神門ひと
女子高等師範學校保母 松村史
女子高等師範學校保母 愛家ふ
女子高等師範學校保母 林、小、四、兒、八
東京盲啞學校々々長 青、水、禮、生
女子高等師範學校教授 佐藤水
女子高等師範學校教授 岩手縣師範學校教授 佐藤水
女子高等師範學校教授 中村五
女子高等師範學校教授 下村三四
全 鄭越生

幼兒保育につきて
女子高等師範學校教授 東水基
女子高等師範學校保母 清水吉

公儀の養成(禮節作法教授の注意)婦人の袴(婦人の白袴車と蝙蝠傘)兒童發賣の體會を多くせよ(幼年唱歌)有毒玩具の發賣禁止に付きて(濟客の意氣)如是我聞

新刊紹介○女子大學○女子高等師範學校入學試驗問題○保母傳習所
○英國女中の崩御○其他數件

發行は毎月五日毎に發行第一號一月廿日發行
定價 郵税金六錢 紙稅册金壹圓拾錢 郵稅金拾錢
臨時増刊は京都定價を定めて別に申す 切手代用は壹割増にて壹錢切手に限る

注文 是は纏て前金にて日本橋區本石町三丁目廿三番地金昌堂宛領收送金は神田今川橋又は日本橋區本石町三丁目廿三番地金昌堂宛の事見本を要せらるゝときは郵便切手(但し一錢に限る)拾二枚を添へて申越さる可し

購讀者 宿所姓名は借書にて御認め之事 轉居の節は新舊共に御通し候間前金御送付を乞ふ 入用なき時は御断りを乞ふ
編輯 關於御照會及原稿御寄附の節は東京本郷區女子高等師範學校附屬幼稚園内フレブル會宛のこと
廣告料 三行廿四字詰壹行十八錢 特別欄壹行四十錢 壹等二行廿四字詰壹行十八錢 壹等半頁五圓 壹頁八十錢 壹頁十圓 二等半頁五圓 壹頁八圓

明治三十四年二月十八日印刷
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
編輯者 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 助
發行所 東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地 助
印刷者 東京市京橋區築地三丁目十五番地 助
印刷所 帝國印刷株式會社
女子高等師範學校附屬幼稚園内

不許複製

大賣捌所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發行所 東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地
東京市京橋區築地三丁目十五番地
帝國印刷株式會社
女子高等師範學校附屬幼稚園内
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地
東京市京橋區築地三丁目十五番地
帝國印刷株式會社
女子高等師範學校附屬幼稚園内
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地
東京市京橋區築地三丁目十五番地
帝國印刷株式會社
女子高等師範學校附屬幼稚園内

高等師範
學校教授
東京府師範
學校教諭

黑田定治君閱及序
立柄教俊君校閱

國民教育學會編

新國民心理學

全一冊
定價金五拾錢
菊版二百餘頁
郵稅金八錢

近來心理學の著作の梓に上る者甚多しと雖、未だ國家教育の依りて以て立つところの國民の心性を講究し、その心理を説明したる著作を見ざるは、識者の常に遺憾とするところなりき。本會此に見るあり、近代大家の著作に藉りて以て國民心理學の概要を叙述し、此に本書を編纂せり。蓋し本邦に在りて始めて見るところの良書なり。

●教育時論評 本書は佛國心理學の大家、リボルグン氏其の他二三氏の著に據りて叙述したるものにして、一國民としての心性の攷究を目的とせるものなり。本邦に於て此の種の著書の嚆矢ならむ。文章平易にてよし。目次次の如し、序論、民族心理學の歴史、種族の心理的特性、各種族の心理的特性が其文明の諸要素中に發顯する狀況、品性の結果としての民族歴史、種族の心理的特性の離脱及頽廢、Psychologie 或は Volker psychologie は獨の學者、アイツの唱導により以來彼岸の學界にはます、此方面の心理研究盛大となり、雜誌に書籍に公となりしもの不夥、蓋し此は時勢の然らしむる所にして一方に教育の思潮が「ヘルバルト」の個人的教育より脱して社會の聲が漸次大なるに至れるを以ても知るべきなり。然るに我國に於ては僅に雜誌新聞によつて論ぜられしもの、外未だ此種の書籍を出すものなく。常に予輩の遺憾となせし所なりき。此書餘りに小冊以て予輩の渴を癒するに足らずと雖も而もまた初めて此種の知識を紹介せしもの效は認めざるべからず。特に本書が目下新學界の泰斗たる佛人、リボルグンの著に藉りたるは予輩の喜ぶ所なりとす。本書卷を分つて六となし斯學の歴史より稿を起して種族の心理的特性、及び其が文明の諸要素中に發顯する狀況、品性の結果としての民族歴史、種族の心理的特性の離脱及頽廢を論ぜり。

●教育實驗界批評 本書は日本之小學教師編輯所なる國民教育學會の編輯に於ける。その本編は先きに育成會編纂發行心理學書解説第五分冊として文學士堀原政次氏の解説且つ批評せられたるものと同じき佛國、グスター、リボルグン氏の著書を抄譯したるものにして第一篇民族心理學の歴史十八頁は、リボルグンの著述其他より編述せりとの事なり、此の種の書籍、一冊もなかりし本邦思想界には速かにその讀料を供するの必要を感ずるよりして吾人は此の書の出でたるを歡迎す。

●兒童研究批評 本書は「リボルグン」及び「リボルグン」の著書に基づき民族心理學の要略を示したるものなり。邦文にて記されたる此の種の著書乏しきに際し、其編述の出づるは喜ぶべきことなり。教育者は近時種々世に現はる、社會學と共に此の編を精讀して教育學の新基礎學に通すべきなり。本書の内容は序論、民族心理學の歴史種族の心理的特性各種族の心理的特性、其の文明の諸要素中に發顯する狀況、品性の結果としての民族歴史、種族の心理的特性の離脱及頽廢の序論六篇に分れる。

發兌元

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金

昌

堂

豫告

日本之小學教師

第三卷 第二十六號 二月十五日發行 定價金十錢 郵税金一錢

「東京第一師範學校校長藤澤菊太郎、千葉師範學校校長弘田三郎、福岡縣中學校校長隈本有造、京都府第廿中學校校長土屋貞安、四君の有像傳記、一社説に於て「學務委員の感觸を論じ、小學教員の保護」及び「多田氏の「小學」師を發揚する」國家に對する忠たる所以の論あり。當代教育界に有名なる大澤、熊谷、遠藤、三、文、學士、初之と、横山、北海、道、師、範、學、校、長、藤、本、福、岡、縣、中、學、校、長、落、合、千、葉、縣、師、範、學、校、教、諭、の、講、義、服、部、治、氏、歴、代、御、製、講、義、を、以、て、福、岡、縣、師、範、學、校、附、屬、小、學、校、一、師、範、學、校、新、瀨、第、一、師、範、學、校、附、屬、小、學、校、新、定、の、日、用、文、に、關、する、講、義、變、町、小、學、校、練、習、會、記、事、操、行、查、定、法、實、驗、道、法、成、功、多、言、法、及、び、小、學、校、東、京、府、師、範、學、校、教、諭、の、教、法、小、也、千、葉、縣、師、範、學、校、教、諭、の、訓、練、談、を、初、め、と、其、他、佐、藤、神、奈、川、板、垣、英、城、利、根、川、群、馬、三、師、範、附、屬、小、學、主、事、の、教、法、訓、練、に、關、する、新、著、の、談、話、を、撰、す。「人物月旦」に「學士出身の初學官」即ち大阪の小野徳太郎、神奈川の桑原八郎、千葉の西谷成二、静岡の梶山延太郎、滋賀の矢板寛、埼玉の高田雅種、山口の野田藤三、宮崎の澤田清遠、九氏を初め、

師範學校長として、大阪の大村芳樹、滋賀の矢板寛、埼玉の高田雅種、山口の野田藤三、宮崎の澤田清遠、九氏を初め、

岐阜大久保介壽、福島の木野崎吉辰、青森の小林盈山、山形の柳義太郎、秋田の保田餘次郎、福井の小野恒剛、鳥取の安達常正、徳島の岩崎春二郎、香川の伊藤徳定、愛媛の新原俊秀、諸氏の人物を爲り及評判記を掲載す可し、其の他に例に依りて益々豊富。

國民教育學會編

學校職員恩給法

日本之小學教師 第二十三號

定價金拾五錢 郵税金壹錢

本號は「**學校職員恩給法**」に關する諸般の「**文部省**」に於ける「**同指令**」等を掲載し、且「**官吏恩給法**」を附録せり、其の「**精細なる説明**」は以て吾人小學教師に「**待遇と權利**」とを與へらるるを明確ならしめ、此の「**恩給**」に浴すべき者にして失給の患ひならしめんとを期す、小學教員たるものは須らく一讀を置つる可からず。

千葉教育雜誌評

「教育者の身上に直接に關係を有する法律、規則にして最難解を生じ、解釋に苦しむる恩給法なり。從來これを解釋したるものなきにあらざれども、多くは唯其の「**法文**」を僅に註釋したるに過ぎず。本書は「**國民學會**」にて日本之小學教師の臨時増刊として恩給に關する一切の法規を一括して編纂したるものにて、法律を正し、これに附帯せる勅令、省令を網羅し、加之其の實施手續に關し府縣より文部省に照會せる、何及指令を悉く列敘して漏す所なし、又「**退職料**」に關する「**精細なる説明**」を論説に揭ぎ、法の性質を明確にし、附録として「**官吏恩給法**」を載せ、以て交互の「**參照**」に便し、其の「**重寶**」なる註釋なり。

此書は「**日本之小學教師**」の第二卷第廿三號として臨時に刊行せられたる、學校職員恩給に關する法令を彙輯し、併せて其取扱方、算算方等に關する問答を掲げ、且「**參照**」として「**官吏恩給法**」を附録したる、此の「**便利**」なるなり。

「**日本之小學教師**」第二卷第二十三號として發行せるもの、恩給に關する法令悉皆を輯めたり、論説に「**寺田勇吉君**」の「**小學教員の恩給**」あり。

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金昌堂

此廣告依御注文の御方婦人の子供を見たる旨御附記を乞ふ

高等女學校用教科書及參考圖書廣告

指原安三編

女大學 全二冊 定價金六十錢 郵税金六錢

新編 新保磐英先生著 文部省檢定濟

日本讀本 全八冊 定價金一圓五錢 郵税金廿錢

女子高等師範學校教授武田錦子先生著

英語讀本 全五冊 一卷三十錢(次卷) 二卷卅五錢(近刻)

新保磐英先生著 文部省檢定濟

國內小史 全二冊 定價金八十五錢 郵税金六錢

文學士辰巳小次郎先生著 文部省檢定濟

東洋史略 全一冊 定價金六十五錢 郵税金六錢

文學士小川銀次郎先生著 文部省檢定濟

西洋史略 全一冊 定價金六十五錢 郵税金六錢

寺尾捨二郎先生、有坂幾造先生著 文部省檢定濟

算術教科書 全二冊 上卷七十錢(郵税金各) 下卷七十五錢(八錢宛)

山崎勇著

幾何大意 全一冊 定價金三十八錢 郵税金四錢

發行所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

池田菊苗、櫻井寅之助、原田長松合著 文部省檢定濟

理化示教 全二冊 定價金三十五錢 郵税金四錢

寺尾捨二郎先生、能勢賴俊先生著 文部省檢定濟

理科教科書 全二冊 上卷金三十五錢 下卷金三十八錢

荒木十畝先生著

毛筆畫帖 全六冊 近刻

塚本はゞ子先生著 文部省檢定濟

家事教本 全一冊 定價金七十五錢 郵税金八錢

下田歌子先生著 出願中

家政學 全二冊 上卷四十五錢(郵税金各) 下卷五十錢(六錢宛)

撰家 津田元德著

兒童教授論 全二冊 定價各金五十錢 郵稅各金六錢

田中勝之丞著

兒童心理學 全一冊 定價金六十五錢 郵税金六錢

金港堂書籍株式會社 昌堂



君子瀧杉母の陰松田吉

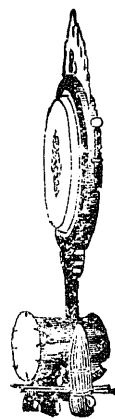
婦人と子ども

第一卷第二號

(明治三十四年二月十一日)

子ども

本欄凡て轉
載を禁ず



いさましー少女

皆さん アメリカ とゆー國を ごぞんじでしよ。こ
の國わ 大變大きな 強い國ですが もとわ イギリスの
領分でしたのが 丁度今から 二百年ほど前に イギリス
と 戦争をして 夫から とうく 立派な一の國にな
ったのです。

その戦争について 面白いお話が ありますから こゝ
で一つお話して見ましょ。

アメリカカ方がたの大將たいしやうで、 그리스ナルド とゆー人ひとが、或時あるときイギリスの 兵隊へいたいに おつかけられて 親類しんらいの家うちえ にげこんだのです。すると 敵てきわ それを知しつて また そこえ 追おっ驅かけて來きた。これでわ 堪たまらんとゆーので またそこを 飛こびだして さつき 道みちからみえぬ所ところに 船ふねを繫つないでおいた 小河こがわの 葭よしの中なかえ かくれよーと思おもつて その方ほうむいて すたくと かけ出だしたのです。

すると 道側みちばたの 草原くさうの上うへで 十二じふにばかりになる 女おんなの子こが 白しろい布ふを 一いっぱい そこらえ擴ひろげて それに水みづをかけた さらして居いたのが 吃驚びつくりして 大おほな目めを張はつて 「おやまー 吃驚びつくりしたこと 誰だれかと思おもつたら 叔父おじさんじゃないか

どーなすつたの」と尋ねました。「おー お前わ へッチー
じやないか 今ね イギリスの兵隊が大勢で 叔父さんを
追驅て来るんだから 来たら叔父さんが どっちえ行つた
か」といつて お前に 尋ねるに違ない。だから お前わ
叔父が 郵便車を取に 彼方え行つた といつて呉れ そ
ー言たら兵隊わ きつと彼方え引返して行くから ね へ
ッチー 頼むよ」「だつて叔父さん どーして ほんとして
ないことを そー言われましょー。私わ知らなけりや 知
らんと ゆーんですけれど……」『それでわ お前 叔父さ
んを 敵に殺させるとゆーものだ……』 そら 言つてる中
に もー敵が来るでわないか そら 馬の足音が 聞える

よ ね ヘッチー 叔父さんか 言った様に言つて呉れ
 神様か きつと お前を恵んで下さるからね さー 宜い
 か ヘッチー」うそを言「子を どーして神さまが 恵ん
 で下さるもんですか。併叔父さん ご安心なさい 私殺さ
 れたつて 叔父さんの逃げ道を 申しませんから よ 宜
 ーでしよー さ 早くお逃げなさい さ 早くく」と
 せきたてました。

話の中に 敵の足音が だんく近よつて來ましたので
 叔父さんわ 急にあわて出して「あ もー逃げるにも遅な
 った どこか隠る所わ ないかしら どこが いーか へ
 ッチー」「おや さー大變 もー其所え 來ましたよ さー

早くしないと 叔父さん さー早く こゝえ ねころびな
さいな 私が其上え 白い布を かぶせて 上から 水を
かけていますから さー さー 早くなさいな 見つかる
といけないから」『そーだ おー も夫ほか 仕様があるま
い』と いった 叔父さんわ ねころんだ。其上え 幾枚とな
く 布をかぶせかけて 上から 一生懸命に さぶくと
水をふりかけて いました。

所え間もなく 騎兵の士官が 鞭をあげて かけつけて
きました 恐しい顔付で 大きな聲をして 『こら 娘 今
こゝえ 一人の男が にげていかなんだか』とおどしかけた。
すると 少女わ平氣で 『さよーで』と 答えました。士官わ



また「どつちえ行つた」六「そ
れわ 申まされませぬ 誰たに
も言いわぬと約束やくそくしましたか
ら」と言いつて しきりに
水みづをふりかけて居いて どの
様ようにおどしても 何なんとも言い
わない。そこで士官しきんのお供ご
が「私わたしわ よくこの子こを知し
て居いますから一つ尋たづねて見み
ましょー」と云いうので 側そば
えきて「これお前まへわ へッ

チーじゃないか　そして逃げた男わ　お前の叔父さんだろ
ー　こゝを通る時何と聞いた　さ早く言ーなさい」「はい
叔父さんわ　敵に追かけられるから　逃げるんだ　と言ー
ました」「うんそーか　どっちえ行つた」「叔父さんわ　船を
見附るのに河え行くのだが　敵が來たら　郵便車の方え行
つた　と言つて呉れと　いーました」「あー分つた　いー子
だ　叔父さんを　助ける爲でも　うそを言わぬと　言つた
のだな。其時叔父さんわ　何と言つた」「ハイ　それでわ
叔父さんを　敵に殺させるとゆーものだつて」「あそーか
夫でお前わ　殺されても逃げた道を敵に　言わぬと約束し
たのだな」「さよーで」と言つて少女わ　涙を　どんく流

して居ます。「叔父さんわ 喜びなすつたるゝ すたく 逃

なすつたるゝね。そして 何方へ行つた え 『それわ申さ

れません』「あそゝだっけ 忘れて居た 併し 叔父さんわ

一番終に何と云つたの』「あのね 叔父さんわ そゝそれほ

か仕方あるまいって』

へッチーわこゝ云つて大聲を擧げて泣き出して 前掛で

顔を隠して仕舞いました。

そこで兵隊も もゝ聞く丈聞いたと思つて 河側の方え

行きましたか 人の影わ もゝございませんから 遠くえ

逃げていったと思つて もと來た道え 歸りました。

グリスチルドわ 前から小さくなつて 布の下に 隠れ

て 上からざぶく水をかけられて居たのですが もー誰
も居ないと言ーのを聞いて びしょぬれになって出て来ま
した。夫でも やつとの事で命が 助かったのです。
あとで戦が仕舞ってから グリスタルドわ 生れた子に
へッチーとゆー名をつけて このいさましー 姪に助けら
れたことを いつまでも忘れない様に致しましたとき。何
とえらい少女でわありませんか。

鳥と子ども

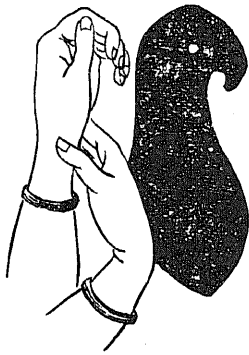
皆さん ごらんなさい この子わ 学校えも 行かないで
石盤や 本を わきに おいて こんなとこに ねころん

と
り
で
す。
こ
ん
ど
わ
た
か
と
に
わ



で遊あそんでいましょー。
するとからすが木きの上うへであ
ほーあほーといいってないて
います。

さー皆みなさん
たか
と
にわとり



た こ



タローノ タコヨリ シローノ タコヨリ イチバン
ワガタコ アガレヤ アナゾラ タカクモ シラクモ



タカク アガレヤ タコ タコ タコ タコ アガレ
コ エ テ アガレヤ タコ タコ タコ タコ アガレ

た こ

太郎たろうの たこより 次郎じろうの たこ

より 一番いちばん高たかく あがれや たこ

たこ たこ たこ たこ あがれ。

わが たこ あがれや あをぞら

たかくも 白雲しらぐも越こて あがれや

たこ たこ たこ たこ あがれ。

猿の物真似 (二)

やまとの翁

猿の人真似といふことは、誰でも、よく知つて居ることですが、獵師などは、この性質を利用して、猿を生擒ことが、たび／＼あるそゝです。これについて一ツ二ツ面白いお話をしてみましょか。

獵師が猿を生擒一の方法は、こゝなのです。先づ一の箱を造るのですが、その大さは、丁度自分の這入る位で、それに開閉の出来る戸をつけて居る。但、その戸は、箱の中へ、這入て閉ればピシャーと錠のおりる様に出きて居るのです。そこで獵師は、この箱を荷負うて山に行きますと、例の猿どもは、澤山木の上にあつて、キー／＼と鳴いて居ますが、獵師は先一番猿どもに、よく見える所へ這入て行て、彼の箱を下しますと、猿どもは、何だか人間が妙なものを持って來たな

と思つてシューッと見て居ます。すると獵師は、やがて其箱の戸を開けて、中へ這入るのです。這入つて戸をしめますと、ピシャーと錠がおりる、併獵師は、錠を持って居ますから、すぐこれで戸を開けて出る。この様にして、また這入つて、また出ると言ふ様に何遍となく、やりまして、それから、シューとこつちの方へ來て、かくれて見て居るのです。

最前から、獵師が、妙な箱を持ってきて、出たり這入たりするのを、猿どもは、木の上から黙つて瞬もしないで珍し相に咏めて居ましたが、もゝ真似たくつて堪りません。そこで獵師が出て行くのを待かねて、大勢一度に木から飛び下りまして、いきなり、開口から二匹飛び込んで戸を閉めるのです。戸を閉めたが最期ピシャーと音がして錠前がかゝつて、もゝ開けて出ることが出來ない。閉て込められた猿どもは、中で大騒

をして出様どもがいて居る、外の猿はしきりにキーキ
ー鳴いて外から戸を開けて助出と一と騒いで居る、そ
こへ以て例の獵師が出て來ると大勢の猿どもは、皆逃
げてしまふから、二三匹の猿が這入つてる箱を荷負う
て、ソロ／＼山を下りて歸るのでと。

謎々

蚊が一匹ブーンと飛んできて、人の顔へたかつた。

そこでバチーッと人の手でた／＼かれたが最期、蚊に取

つては(日本の國名ニツ)

東洋の聖人といふのは誰でしよー(御飯道具ニツ)

雨夜の三味線とかけて(文房具ニツ)

武士の喧嘩とかけて(郵便に使ふもの)

皆さん四ツ問題を出しましたから考へて御覽。とし

て、この次までに、答を送つて頂戴な。



家庭

子供と境遇

神門 とも

角立てる箱机など据え置きたる室に幼兒を遊ばしめ
て「ソレアブナシ」と呼び養へたぎりたる鐵瓶の湯の沸
けと音せる火鉢の側にみどりして「ソレ火箸は弄ばぬ
ものぞ」と云う間に鐵瓶ひき倒うして火傷せしめ或は
與ふるを好まぬ菓子等其見得る處に置きてねだられ泣
き出されて「仕方ナキ子ヨ」と云ひつゝ與ふる如きは世
の家庭にて多く見る處なり此他世に有勝なる嫁姑の間
の不和にして日として不満不平の顔を見ざるはなく常
には許さるゝ如きことも時としては嚴禁せられ若しく

は罰せらるゝ等祖母若くは母の機嫌界に左右せらるゝも間々見聞する所なり此の如き境遇にて養育せられたる兒の不幸如何計ぞや不知不識の間に於て日々の實驗は我儘強情不正直陰險等の悪性行を形作り來る實に等閑ならぬ事と云ふべきなり

大人にても常に善きものを見且聞けば自ら其感化を被りて善に移り悪しきものを見且聞けば自ら其感化を受くるを況んや蠟の如く柔かき頭腦を有する幼兒等は未だ善惡の差別なく只目に見耳に聞き手に觸るもの皆其好奇心に任せて見聞し摸倣して假令其印象は弱くとも着より落つる雨滴の墜き石をも穿つが如く漸く其深さを加へ行くを思はゞ其影響も一層大にして實に後來恐るべきものあり

其形ち作られたる性は善にもせよ惡にもせよ之れ皆其撫育者殊に主として其父母の作れる結果にして後

年其喜び其患ふる處は皆是れ其自らなせる産物なりされば善き實を結ばんことを欲するものは須らく相當の注意を拂はざるべからず

其注意とは何ぞや種々あれども幼時に於て最も大なる影響を與ふるものは懇篤なる訓誨にあらすして其境遇なり其周圍の事情をして善良ならしむるにあり

幼兒の遊ぶ部屋は如何に飛ぶもはねるも傷くべき物もなければ、ざりとて又何物もなくして無聊に苦み惡戯に陥る様のもなく其室内にあるものは凡て幼兒の見、聞き手に取りて差支なきものにして與ふまじと思ふものは始めより置くべからざるなり從て與へて惡しと思ふものを強請せらるゝこともなく禁止の詞も多用せずして自然に大らかに生長すべし嘗て一年六ヶ月にして始めて我意を貫くことを學べる兒ありき其撫育者は真によく愛育すれども一の注意を缺きたる爲に始

めは大らかにして怒りて泣く等のことなかりしに知恵の進むに従ひて火鉢の側に來り火箸を弄ぶことを覺え之れを止むれば泣きて之を得んとしたりき然るに撫育者は其泣きを止めん爲に之を許し又該兒は之れによりて泣きて我意を通すことを學べり後凡て己が意の如くならざるときは此方法を用ふるに至れり若し境遇教育の大切なることを知りたる撫育者ならんには決してかかる機會を作ることなかるべし實に大切なるは其境遇なり

此の如きは不從順の惡性を養成するに止まると雖も猶進みて一家内の不知則父母の間若くは親子の間に不調和なることあらんか實に忍ぶべからざるの性行は作り出さるべし不平、不正直、疑惑、殘忍、執拗等は皆此等の家庭より來る結果なり

一家の不和にも嫁姑の不調和、父母の不和の外に特

に其兒の爲に起るものあり則其兒の嘗て里子となりし爲に或は父母の手を離れ他の兄弟と離れて一人祖父母の手に人となりし場合ありかゝる時に於て假令程なくして親の手元に歸るとも一般に父母は他兒と一樣に愛しむことをなさず幼兒も何となく遠慮する所ありて打解けがたく遂には父母にも祖父母にも偏頗なる處置起りて不和の媒となるものあり此の如き兒は父母の面前にては卑屈執拗にして天真爛漫たる處を缺き祖父母の前に出れば我儘至らざるなきに至る

又或家には嫁姑の不和の上に祖母は兄を偏愛して其妹を憎み他出のかへさに與ふる土産にも甲乙あり遊に連れ行くにも常に妹を殘し兩者争ひ合ふ時は常に原因を調べずして直に妹を叱責し不斷意地惡しき取扱をなしたる爲に遂には兄弟の間も争絶ゆることなく互に同情なきは勿論他に對しても人の惡しきとあると

悦ぶに至れり

嘗て悪性を有する二児の原因を調べたるに一は前者にして一は後者の境遇にあるものなりき而して其影響の及ぶこと多きは普通以上の頭腦を有するものにして愚鈍なる兒は少きを見る惜むべくいたましきことならずや

嗚呼一家の中春風吹き渡り且多少の教育思想を有し幼兒は善良なる事情の下に成長せしめざるべからずとの考あらば如何で今日我兒は不従順なり不正直なり酷薄なりとて歎くことの必要あらんや悪き種蒔きて後悔いんよりは蒔かざる前の注意こそ大切なれ

“Children are like wax to receive impressions, like marble to retain them.”

どんなにでも、なり易い所から云ふと、子供といふ

ものは蜜蠟の様だが、三ツ子の魂百までと云ふ方から見ると、また大理石の様だ。

何故泣かなくなつたでせう

松村 ひさ

私が世話をして居る幼兒の中に今六年五月月になる一人の男の兒があります。此兒は、正直で活潑な善い兒でありました。それに、昨年の夏休後は前と打つて變つた不正直な亂暴な善くない兒になりました。あまり變り方がひどいものですから、其原因を探る爲にある日、親をよんで、うちの様子をさゝました。其親の言ひますに、

私の近所に百軒長屋といふ長屋がついて居ります。そこには、悪い子供が澤山ありますから、いつも遊ばせぬ様にして居りました。ところが、

夏休中ふと一しよにあそびはじめまして、それ
からといふものは、家内中でどめるのもさかす。

ぬけてまでまゐります。しかも、いつも〜、泣
かされてはかへります。それで親共は、泣いてかへ
る様のところへ行くな、とどめましたが、やはり皆
の目を忍んでは行きます。ところが此頃は、行く
ことは行きますが、泣いてかへることはやみまし
たから、まづ世話がな、と思つて居ります。

と。そこで私 はさらに、

一體何故泣かなくなつたでせう。

と問ひました。そうすると、其親は

さあどういふものでござりますか。

と答へました。

私は之に付いて、かやうに考へました。即ち、泣

らてかへる間は、まだ此兒が善いものですから、悪い

子供に抵抗するとかできないで、まけて泣くのであつ
て、だん〜其悪い子供とあそぶにつれて悪くなり、悪
につよくなつたものですから、悪い子供に抵抗する力
ができて泣かずともすむ様になつたのでありませう。
はたして、此通りであるとする、子が泣かなくなつ
た原因を考へて、親たるものは、泣かなければならぬ筈
です。そうして嚴に、悪友と交はることを、とめなけれ
ばならない筈です。

ですから親といふものは、たえまなく、子供の様子
に注目して一寸した變化でも其原因を考へ、それに相
當したしつけをしなければなりません。子供の心と行
の上には、いろいろの變化を考へしに見すとし
て居ると何時の間にか子供はさまざまに變ります。實
に、氣を付けなければならぬものではありませんか。

簡易料理

蠣の西洋料理

愛家 女史

丸々と肥つた蠣二十匹計を、焼き鍋に入れて、蠣から出でた水で二分計りの間沸騰させて、蠣が餘りに小さく又堅くなり過ぎないくらいの時にその汁を捨て、更に新しいパンを一時間計り牛乳の中にひたした者ど、鶏の肉を小さく碎いたるもの、二種を混ぜ合せて糊の様にドロ／＼にして、之を目の細かい篩で漉し、その中に一二箇の鶏卵の黄味と少量のバターを加へ、先きの蠣をそのなかに充分ひたし、さてこれを引き上げて、パンの細粉の上に轉ばせば、コロッケの衣の様になる夫を、油を引いた鍋の中で焼くのです。

泡雪はんべん

鯛、平目、若しくはこの様な類の魚を三枚におろ

し夫を、骨を抜いて庖刀でたゝいて碎けたら摺鉢で摺りつぶし、その中へ鶏卵の白味計りを入れて摺つて茶煎で泡を立たせ、鉢の底迄泡になつた時、ぐらくと白湯の沸き上つた鍋の中へ、泡を一さじつゝ、すくうて入れるのです。味が至極淡泊で上品で宜しい様に思はれますから、やつて御覽なさい。

花形梅干

魚の不自由な時には一寸可なりの品です。梅干の肉計りを取つて摺鉢で能く／＼摺りつぶし、少し計り水を入れてゆるめた上、砂糖と葛粉とを程よく入れて火上に沸騰させて、取りおろして角な入れものへ入れ置いて花形若しくは望みの大さに切るのです



子供にうつれる家庭のかけ

林 ふみ

私が世話しました子供のの中に入つになる一人の女の
児がありました、この児は、うまれつき伶俐で、従順
で、しかも快活で、實によい児でありました。けれども、
惜しいとは、一つの疵がございました。それは、他で
はありませんが、人のあやまり、又は非を見ると、直ちに
告口をし、また友にさ、やくことでありました。實に
これは玉に疵でありますから矯正に骨折りましたけれ
ども、一向さゝめがありません。折から私はふとした
ことから、この児の父兄としたしく、交際することゝ
なりまして、一日其の家庭をたづねました。時に一人
の客が、私といれちがひに、客室を出ました、さて其
家の様子は一寸見ましても、清くわたゝかきもの、様

でありまして、主人夫婦はいふまでもなく、打ちひれ
て居る子供等は、よろこんで私を迎へ種々樂しき話に
時をうつして居りました、處が話は、はしなくも先
客のことにうつりまして、主婦は何げなく其人のこと
を、とやかくと、悪く評しはじめました。
あはれ、かやうのことをど思つて居りますうちに、其
の女の兒も之に和していはじめました。
あゝ實にこれありてこそと大にさとりました。
即ち家庭に於ける母のかやうの行が其子にかけを
うつしたのでありませう。
かやうな事は一寸考へると、小さなことの様で、其の
主婦も何の氣なしに、したやうでしたが、かういふこ
とが度重つて遂に大きなかけを、子供にうつしたの
でありませう。そうするとこれより、もつと、大きな
ことの影響は、どれほどであるかと思ひますと、實に

恐ろしい様であります。

印度土人の家庭生活

Y. I.

近頃ある外國雜誌を見ましたが、こゝにいふ題の咄が載てをりましたので、記載することに致しました、原文は印度土人の演説の筆記で大變に面白く書いて有りますけれど、譯文はとてもそれを寫し出すことが出来ませんで、どうか其意味だけをお取下さらば幸いです。

御承知の通り印度と申す國は大變に廣大な國でございまして氣候も一樣でなく、その住民も澤山な異つた人種から成り、文明の程度に於きましても開化せんとするものもあり、半開なるものもあり、又未開のものもありません、更に其社會組織に至しては、

全く反對で氷炭相容ぬと申すようなものさへありますから、其家庭の狀態を總括して御咄することも容易のことではありません。

されども、此の數多の異りたる人種と宗教のうちに、二つの判然と目立ちて區別せられたる組織がありまして、幾百萬を以て數へらるゝ、印度の人民の過半はこのうちに含まれて居るのでありますが、此二つの社會と申すものは、即ち印度人とモハメット教徒でありまして、其風俗習慣など互に甚しく異つては居ますが、併し其西洋の氣風に反したる點に於ては、二つとも一樣です。

モハメットの命令、その信徒の生活に關しては、世人の熟知する處でありますから、こゝに委しく述べる必要はござりませぬが、一言云て見ますと、此宗派の男女は、印度人よりは遙に、自由を有して居りますので、男

子は一人若くは數人の妻を娶ることも出來、或は結婚しなくて居ても、全く隨意なのです。女子は一般に少年のときに嫁する風ですが、若し不幸にして寡婦となる場合には、再婚したとて決して差し支へはありません。既にモハメットの先妻は、寡婦であつたと申すことです。モハメット教徒社會では、印度人の様に人々を互に離隔して、交際などを許さぬようなる階級的妄説も行はれませんければ、又生れ落るより死にいたるまで、大事にも、小事にも、其屬してゐる階級の規定に従つて生活し、自分許ではなく、子孫の末までも決して其境涯の外に出づることを許さない様な、強壓的運命もないのです。ですから印度人に比べて見ますとモハメット教徒は、よほど自由な人民です。

斯く申しますと、或人は問はれるかも知れませんが、「印度の婦人は、常に閨房に閉鎖せられてゐるではない

か、婦人は凡て閉鎖せられてゐるのに、その人民は自由なる人民といはれようか」と併ながら、婦人を閉鎖するのは極めて少數な富豪者のなす一種の贅澤でありまして、モハメット教徒の多數の婦人は、恐らくは訪問者としてさへも未だかつて閨房に入つたとはありませぬ。勞働者とか、農夫とか、人足とか、製造所の職工とか、其他百般事業の被雇人等は、どうして其妻女を閉鎖しておくのが出來ませうか、寧ろ此等の妻女は、その良人と同じように朝から晩まで出て忙がしく働らなくなつてはなりませんのです。下等社會の教徒になりますと、今一人の妻を娶ることが都合がよいと思ふ場合には、第二の妻を娶るのです、それは丁度無給の下婢を雇ふやうな者なのです、或大家の園丁が第二の妻を迎へし理由をさきますと、其主人が園庭をひろげた、爲めに一人の人足の手間を増したが故だと言

て居ました。實に彼等の妻は、無給の人夫であるので、此下等社會の婦人らが、上流社會の同胞姉妹等の離隔せられて、威嚴のあることを羨むとは、尤で英國の貧婦等が、自分は日々の勞働に氣も身體も倦み疲れてゐる所へ以て、揚々と馬車を馳せて通りすぎる貴婦人等を見て、頻に羨ましがるので同様であるのです。又閨房内で成長した婦人達は、其習慣に泥着しめて、此風俗を廢することを非常なる耻辱として忌み嫌ふのです。稀には大膽な婦人で、今少し自由を得んことを欲するものもありませんが、西洋婦人の如く一般の社會を自由に奔走して暮すようなことは、モハメット教徒婦人の最も反對する處であります。

近頃比較的に教育あるモハメット教徒、ことに外國に旅行した人々は、婦人を閉鎖することが大變に一般家族に害のあることを認めて此制限を弛くしようと云ふ

ことを試むる様になつてきました。上流社會の年若き女子で、教育を受けたもの、社會では、その親戚たる男子の出人を許して居るものもあり、又あるよほは進歩したるモハメット教徒の中には、この風習を全廢することを望むものもありますけれども、かゝる進歩主義の人々は、きはめて少數で、しかもその妻女たるものは、斯る改革に對しては決して賛成しません。これはこの人達は、これによりて益する處のなきのみか反つて其高貴なる位置を顯す區別を失ふといふ損があるからなのです。

印度に屢々起る饑饉の時などでも、政府に於ては救濟の準備も整ひたるに、婦人達は閨房より一步をいで、救を請はんよりは、寧ろ居残りて、徐に餓死する方が勝だなどと考へて居ますので、政府に於ては、この憐むべき婦人の所在を調査させて、其報告を待つて

食物を送らなくつてはならないことが、度々あります。

之れによりても、モハメット教徒婦人社会のせればど

因循なるかは知れませう (つくだ)



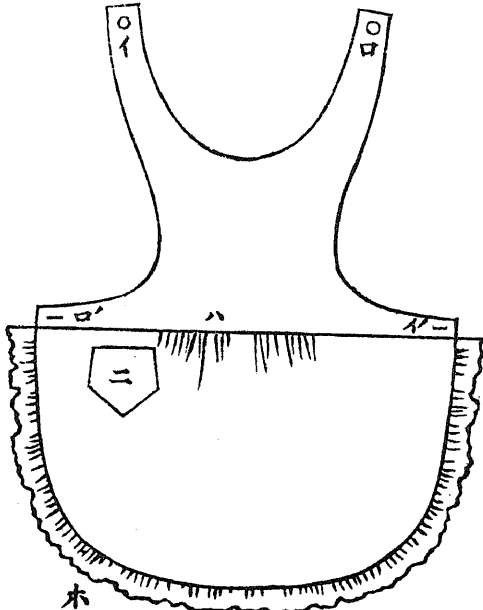
前かけ

育兒女

子供は活潑に運動するものなり其際には遠慮會釋なく膝を突き或は土砂中に座し或は轉々することを好む然るに其衣服は假令粗末にして如何に汚すとも可なる地質を撰みたるにもせよ日々清潔に保たしめんとするは容易の業にあらず故に近時流行する處の前かけ様のもを相當の粧飾を施して用るなば打見たる處も可愛らしく勞を省く上にも經濟上にも大に宜しきものなり今其形の簡單なるもの一二を擧げん

(イ)及(ロ)は釦を附する所にして(イ)及(ロ)は釦を止

(一)

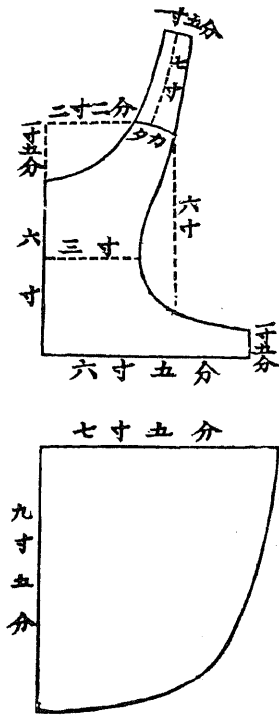


ひる穴なりとす而して(イ)は(イ)に(ロ)は(ロ)にかく
 べし(ハ)の部は寄せ駢にして前膝の所に弛みを與ふる
 爲なり(ニ)は隠しにして子供用のハンカチ及鼻紙を入
 るゝ處なり(ホ)は飾の爲駢どりし切れを縫ひ付けたる
 なり

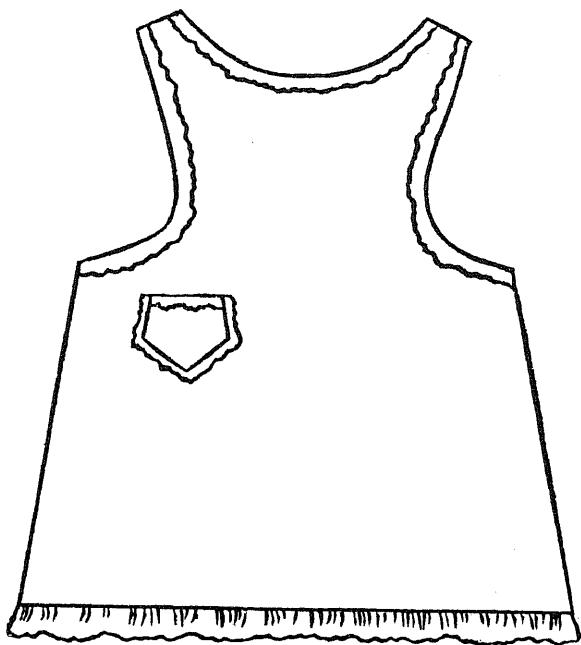
裁方子供たいしやうの大小たしやうにより多少たしやうの斟酌しんしやくを要まよするとも四五歳
 位くらゐならば大凡下おほよそしもの寸法すんぽうによる

縫方ぬひかた 至いたつて簡單かんたんにして相當そうたうの縫代ぬひしろとりて圖ずに示しめす如ごとく
 縫ひ合ぬひあはすれば可べなり

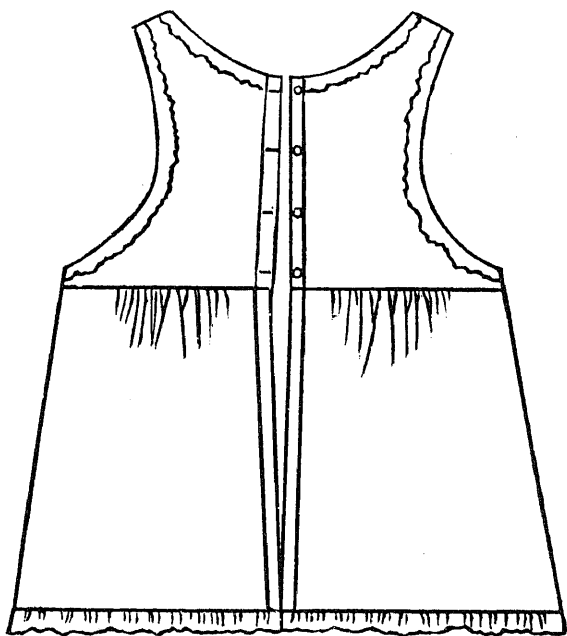
白キヤラコびやくかりこを用もちゐたるは純白じゆんぱくにして清潔せいせつなれども汚けがれ
 やすし稍色やういろつける更紗形さらさかたのキヤラコかりこ若もくは織紋もんかりの毛
 縹じやう子すに白色はくしやくのキヤラコかりこ麻あさ又は絹きぬを以もつて裝飾そうじやくをなしたる
 は美うつくしく一いっ種しゆの飾かざりとなる

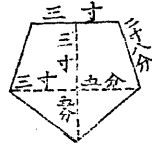
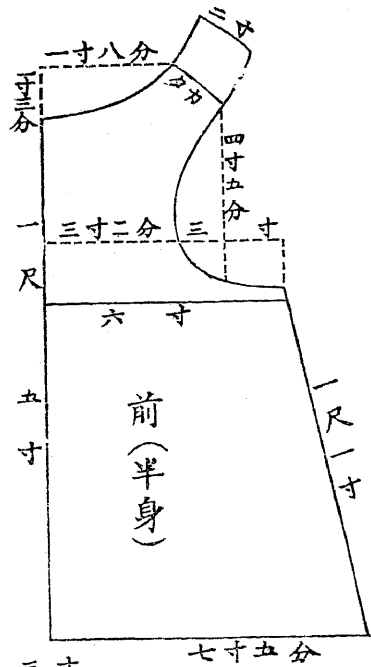
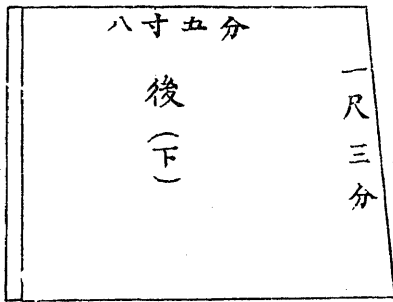
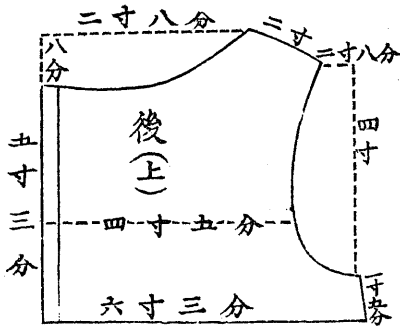


(二)
前面



後面





兒母里そーだん

こにしのぶはち

二十六

婦人の職掌の中で何が一番大切だと申さば人の妻となり、人の母となりたる後に子供を保育する程大切なるものはあるまいと思わる。婦人として人の妻となりて終るもの少なくないが、これわ色々な事情が障りとなりて止むを得ぬ上のことにて天然の職掌の一を全くせぬといふ責免るとわ出来まい。又人の妻となりて一人も子供の無い人もある、これも羨むべきことでなくて反つて氣の毒の不幸者といわなければならぬ。人の母となりて第一の職掌わ子供の保育なりと

いなければならないが、そむ寒暑の衣服に差支なく飲食に事缺かせぬのみのことでわかない、衛生の道にかないて教育をいたし身體も精神も平等の發達を遂げしめて、天晴の國民となすのである、近年我邦にても女子の教育が重んぜられ高等女學校や、女子師範學校の勃興するの如何にも嬉しきことなれど、徒らに資治通鑑の拔萃よりの漢文や現今の國民にわ餘り耳遠き和文などを交せくり數えて今日用の文通に拙ら誹りあるわ譽むべき事にわあらず、又世界の日本になりたればとて地球上あらゆる國々の地理氣候の巨細の知識もないにわまさると申しても之れを直ぐ我身に迫り來る母の務たる子供の保育に比べなば、知らでも足る蠻族異民もあるでわなにか、幼兒保育に實に人の母たる責ある女子の身にわ何より大切の務にして只に専門の保母という職名を帯べる人の役でわない、女子と生れた人々

の必らず豫習せぬでわならぬ課業ならぬか？、左れば高等女學校や女子師範學校の課目にわ是非共に幼兒保育の一課を加へ若し之がために既定の時間にてわ加うべき餘地なくば學識を銜う外には餘り實用なき學課を廢するか其時間を減するかして將に迫り來らんとする母の豫習たる幼兒保育の一課を加うべきでわなにか？、幼稚園の東洋で極端なる我皇國まで今日のごとく盛に行わる勢となりたるわフレイベル氏の教育法の卓絶せるによるとわ申せ一にわ之を助成せる偉大なる力なる男爵夫人マールレンホルツビュロー氏が陰に陽にフレイベル氏を助けて自ら弟子と稱し幼稚園の普及を圖りたる功績わフレイベル氏の創見の功にも譲らぬものである、嘗て普國政府のフレイベル氏の甥カールフレイベル氏の自由主義の雜誌を發行したるを人達してフレイベル氏が時の政府に不満を抱き國民の幼兒よ

り自由主義を吹き込み込むものと誤り幼稚園の幼児の活潑なるを見てわ等閑に附しがたしとなし幼稚園禁止令を發したる時に際して此夫人が當路者に建議論を奉り國民に向つて普及の演説を繰返すなど中々通常男子も及ばぬ程なりしといふ此夫人が師範學校課程中に幼児保育の一課を加えんとを主張せし語の中に亞弗利加内部の記事亞細亞極東の氣候、果して母の責務たる幼児保育の一課を差置さても教えなくてわならぬ程の値あるか、幼児保育法の發見せられざりし昔時に制定せられたる課程及時間割を今日此新教育の大發見ありしに拘らず、變更するを躊躇するわ何たる迂遠ぞと、予も今此夫人の語を借りて全國女子教育に従事せらるゝ當職の方にわ勿論年少の婦人の方々にわ幼児の保育の保姆の專業にあらで近く我身に迫る大責任なりと覺悟せられんことを勸告して止まないが、更に保姆諸君に

向つてわ婦人と子供と申す屈竟の機關の出來たるを幸として全國幼稚園若くは高等女學校女子師範學校に従事せらるる方々に各地固有の子守歌を徵收せられんことを偏に希望するなり、此事わ嘗て音樂學校教授小山作之助君に話したこともあり、同君も非常の賛成にて自ら従事せんといわれしが或は既に集め畢られたらんも知る可らず左れば之を借りて毎號に分載すること乞われたし、時事新報に昨年登載せられたるもあり今の時にわたり我國各地固有の子守歌を集むるわ此雜誌が他に卒先すべき義務と思わるが如何？、



學 術

獅子の 話

佐藤禮介

前回には、岩川先生が動物中にて最も目出度いもの

考へらるゝ、鶴龜についてのお話があつたが、今回、私は獸中の王として、考へらるゝ、獅子についてお話を致さうと思ふ。

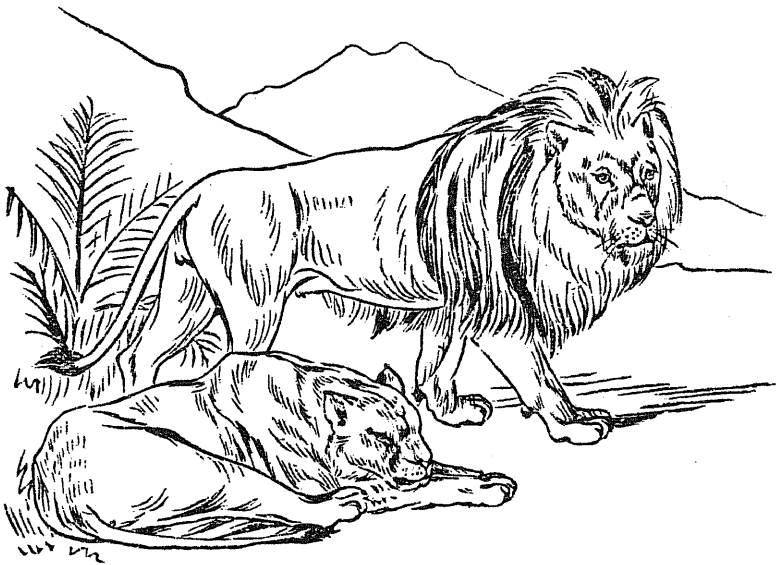
古來の傳説——本草綱目と云へる古書に獅子は百獸の長たり、西域に出づ形虎の如くにして小なり、黄色にして、亦金色の猿狗の如し、而して頭大く尾長し亦青色の者あり銅の頭鐵の額鈎の爪、鋸の牙、垂れたる耳、昂ぎ鼻、目の光り電の如く吼ゆる聲雷の如く形鬣あり牡は尾の上に茸毛大さ斗の如し日々走るに五百里、毎にひとたび吼ゆるときは百獸辟易す虎を拉ぎ尻を裂き象を分つと記せり、如何にも風雲に乗ずる龍虎の臆説にも劣らぬ書き方なりさればにや猛く勇ましきもの、雛形として畫かれ、唐獅子の彫刻物は神聖なる者として神社佛閣の前に安置せられてある、其の他器物衣服の紋様に於て牡丹に唐獅子の形を表はせ

るものが澤山ある、獅子の傳説はかくの如く奇に且つ怪なるが實際は如何なる形で如何なる性質であるか左に述べようと思ふ。

産地と形態——獅子は西部亞細亞及び亞非利加に棲息して居る猛獸である、體の長さは殆ど虎に同じく只少しく小さくある最も大なる獅子は鼻の端から尾の先まで一丈許りあり其の内、尾の長さは三尺計で牝は牡よりも凡一寸許り小さくある。

獅子は猫など、同じ類族であるから全體の形が甚だ能く似て居る併し獅子の瞳孔は圓形で伸縮するもので決して猫の様に縦線となることがない。

獅子の牡は頭の頂、頸及び肩の上に長くバリバリせる毛があつて鬣となつて居り、怒れば之が直立して前方に向うゆるゑ其の怒れる顔貌は實に恐ろしいといふことである、全體の毛色は産地によつて種々であ

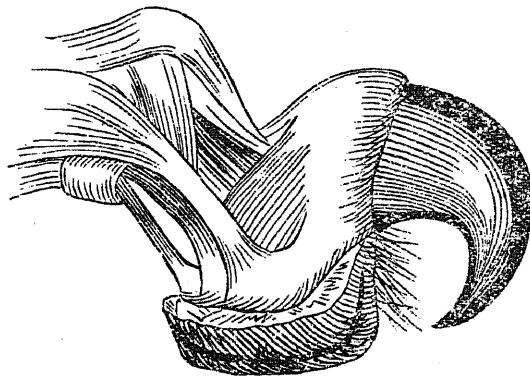


るが通常は黄ばみたる茶色で、往々暗紅色又は淡き灰色
 色なのがある鬣は全體の毛色と違つて淡黒色である、
 牝には少しも鬣を具
 へない、牝牡共に尾

の末端には長い毛の
 總がある、爪は鉤の
 様に曲つて甚だ鋭
 い、平生は之を引き
 上げて爪先が地面
 に觸れない様になつ
 て居る即ち常には爪
 を隠して入用な時に

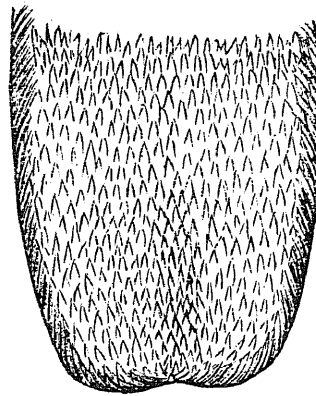
のみ急に之を突き出すのである。

獅子は虎、豹、猫などの様に生きたる獸類を食とす
 るものであるから齒列は甚鋭くなつて居る前齒は餘



程ほど小ちひいけれども牙きば即すなはちけん犬いぬ齒はは極きまめて大おほきく敵たかと闘たかふに
 は重おもなる武ぶ器きである奥おく齒ば即すなはち臼うし齒は中なか々く鋭とくて肉にくを嚙か
 み切きる用もちをなす。

猫ねこの舌したのザラ／＼するこは世せい人じんの能よく知しつて居ゐる



ことであるが獅子

の舌したは一いっ層そうザラザ

ラすするとが甚はなはだ

だしい其その舌したは長ながく

扁ひらたくて其その上うへ面めん

には曲まがりたる棘げきが

無む數すうに列ならんで居ゐり

舌したの中央ちゆうにある棘げきは最もと長ながくて殆ほとど一いち分ぶん七しち厘りん許ばかりりもあ

る、故ゆゑに獅子ししの舌したは全まったく大おほきな擦わ蓋び子の様ようであるから

其そのの食くふところの獸じゆう骨こつから悉ことごとく筋きん肉にくを舐なり取とることが

出で來きる。

獅子ししの前ぜん脚かくの趾あしは五ご本ほんで後こう脚かくの趾あしは四し本ほんである趾あしの
 下か面めんには厚あつき皮かわを被おはれて居ゐる肉にく塊かたまりがあるから歩あむに
 に少すこしも音おとがしなない、それで野や獸じゆうを捕とふる爲ために近ちかづく
 のは甚はなはだ便べん利りである、此この他た、消しょう化か器きや呼こ吸そく器きのこ
 などは餘あまりくだ／＼しきゆゑ畧りやくす。

習しゅう性せい——佛ぶつ人じんバツフラン (Bulfron) は骨かつて極きまめて艶べん麗れい

なる妙みょう文ぶんを以もつて獅子ししの性せい質しつを記き載ざいし勇ゆう猛もう、寛か大だい、高こう尙しやう

等どうの性せい質しつ、深しん切せつなる感かん情じゆうを有ゆうするものなりと云いひて居ゐ

るが實じつ際さいは全まったく然しからざるこが知しらるゝのである、

繁はん殖しよく——獅子ししは繁はん殖しよく時ときに於おいてのみ一いっ牝びん一いっ牡ぼつの共きよう棲せいを

する、兒こは一いち回かいに通つう常じょう三さん頭とうを産うむ而しかして其そのの子こが獨どく立りつ

の生せい活かつをなし得うるまで即すなはち三さんヶ年ねんの長ながき年ねん月げつの間あひだ牝め杜と

共ともに協きやう力りきして之これを養よう育いくする元がん來らい此この猫びょう族ぞくの動どう物ぶつにて

は兒こを養やしふことは只ただ牝めのみが負か擔たんする仕し事ごとである、獅し

子しの如ごとく牡おとも其そのの兒この爲ために食しょく物ぶつを求もとめて之これを養やしひ且かつ

捕食法を教ふるものは他に多く見ざる例である、獅子は純然たる群居性のもではないが一対の牝牡、及び成長したる兒が群居することがある併し餓ゆるときは一個の餌を争ひて互に闘ふことも往々ある、

夜性——獅子は通常夜間にのみ出で、食物を求める即ち薄暮より沼澤河畔などに待ち伏せして麒麟斑驢水牛の幼兒等を捕へるが其の方法は是等の獸が出来得る丈け近づく迄潜伏し只一躍して前脚にて其の背を攫み是に噛み付く、かゝる場合に至れば野獸は只狼狽して悶々騒ぐばかりであるから遂に噛み殺さるゝのである、若し一撃の下に之を打ち倒すことが出来ぬときに執念深く無益に追ひ掛くることは致さぬは獅子は到底是等の獸類の迅速に走るのに追ひ付くこと出来ぬ事を知つて居るからであらう斯様に失敗するときは獅子は再び別の隠れ場處を求めて野獸の再來を待ち居る。

る。

家畜の受くる害——獅子は餓に迫るときは人家近く出で、家畜を殺して持ち去ることがある、其の餓ゆると極めて甚しいときは白晝牛羊の牧場に來り牧夫番犬をも意とすることなく突進する、此の時に當りては高さ十尺許の塀をも一躍して跳び越えて家畜の群中に突入し最も近けるものを攫み殺すのである、亞非利加、喜望峯地方にては犢を口に咬へながら廣き池を跳び越ゆること恰も猫が鼠を咬へ去るに異ならぬを見たり人がある、彼が數十貫の重荷を咬へつゝ、數尺の墻壁を跳び越ゆる力量の如何ばかり大なるかは吾々の殆ど量り得ざる程である。

水牛との闘争——獅子は斯様に強い獸であるが水牛は獅子の強敵である即ち水牛の猛烈なる奮闘には獅子も辟易することがある、スバルマン(Serrmann)氏の

言によれば「嘗て白晝一頭の獅子が水牛の群に突進したることでありしに水牛は獅子を角にて突き倒し死に致すべき重傷を負はしめたるを見た」といふことである又亞非利加探検に就きて有名なるリヴィングストーン氏 (Livingstone) の言によれば「數頭の獅子が時として水牛の群を攻撃することがあるかゝるときは水牛の牡は前面に立ちて獅子と搏闘し牝と幼兎とを後方に保護する」といふて居る。

前日の殘肉——餓えたる獅子は餘程腐りたる肉をもかまはず食ふものである、又前日に喰ひ餘しにる殘肉を翌日再び來りて喰ふ性がある虎豹の如きは獸肉の喰ひ殘しを再び來りて食する様なことがない且つ腐肉は決して食はない。

獅子の吼聲——獅子の吼聲は世の諺にもいはるゝ如く實に壯嚴特殊なるものだといふことである靜かなる

夜には一二哩も隔りたる處にて聞かると、之を聞きたる獸類は大抵恐怖する、家畜の如きは畜舎の一方に集つて戰慄して居る。

食人獅——老ひたる獅子は其の齒次第に磨滅して野獸を捕へ食ふことが困難となるから遂に人類を好みて喰ふ様になり所謂食人獅 Man-eater となることがある、此の癖性を生じたる獅子は村落の近傍に潜伏し夜に入りて土人の茅屋又は旅人の天幕内に躍り入りて人類を咬え去ることがある。

獅子の怒と其の尾——獅子は飽食して且つ怒らぬ時には至極臆病であるが餓又は怒に侵されるれば其の暴猛例へん様なし、さて旅客が若し獅子に出逢ふた時に其の獅子が飽いて居るか性質が平穩になつて居るか又は餓え或は怒つて居るかといふことは其尾に依りて前知することが出来る、食に飽き性穩やかであるときは其

尾の先端が動かかないが若し饑餓に迫るか或は發怒して居るときには其尾を左右に振り動かして體の兩側にシユツ〜と打ち付けるものである、勿論此の時は眼を怒らせ鬣を逆立するが尾は最初から働かぬから獅子の心狀を知るには最も便利である故に旅客若し獅子を見たるとき其の尾が動かなくなつたならば安心して其の側近く通ることが出来るのみならず石を抛ちて追ひ退けることが出来る、之に反して尾が動き初めたらば早速逃るか又は極めて速に射撃して之を殺さねばならぬ。

獅子の狐疑心——獅子は極めて狐疑邪推が深い一たび狐疑心が起れば好める餌食をも放棄して去ることがある、野獸が知らず〜獅子に近づいて何の抗拒もなしに攫殺せらるゝときは獅子は餘りたやすく獲たる餌を却て疑ふかの如く即ち自分を釣り出す爲に故と置かれた餌ではないかと疑ふ爲か其の野獸を食はずに去

ることがある、喜望峯の一住民が平原に於て不意に獅子に出逢つたが餘りに狼狽恐怖したが爲に腰をぬかして倒れてしまつた、獅子も亦不意に人の出たことを愕いたと見え且つ例の疑ひ深き心からして頻りに倒れた人の近傍を見廻して居つたが他に待ち伏せした者あるとでも思つたものか何もせずそこ〜と逃げ去つたといふことである。

要するに——獅子の習性につきて原産地にて觀察した人の記載は大に古來の記録や傳説と違つて居る、古人は獅子の勇猛、高尚、俠氣等を甚しく賞讃してあるが實地の觀察者は皆獅子の恐怖心強きこと、狐疑邪推深くして卑劣なることを記して居る。

(完)

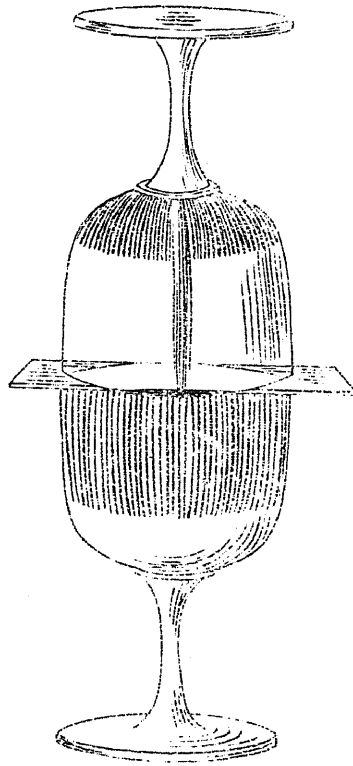


面白き理科の實驗

茗溪學人

私は今簡單な理科の御話しを致したいと思ひます、先づそれを致しますには、大きさが同じい二ツのコップと、一枚の厚紙が入用であります、そこで一ツのコップには其縁まで充分に赤葡萄酒を盛り他のコップには水を充分に盛るのであります

が、水を盛りましたるコップは、厚紙を蓋にしてこれを掩ひ、これを倒にして次の圖に示します如くに赤葡萄酒を盛つたるコップの上に載せす、この時には充分に注意して、二ツのコップの縁と縁とは、全く重り



合ふ様に致しまして、手際よく厚紙を少し滑らして一方に引きますれば、上下二ツのコップの間には、少し許りのすき間が出来ます、左様しますると水と赤葡萄酒との間に、交代が起りまして水は、静かにそのすき間を通りて下のコップの中に入り、赤葡萄酒は次第に上のコップの中に入りまして、水と赤葡萄酒とは全く交代します。この作用は赤葡萄酒

は全く上のコップに入りて一様に擴がり水は下のコップの中に全く擴がりて始めて止むのであります。

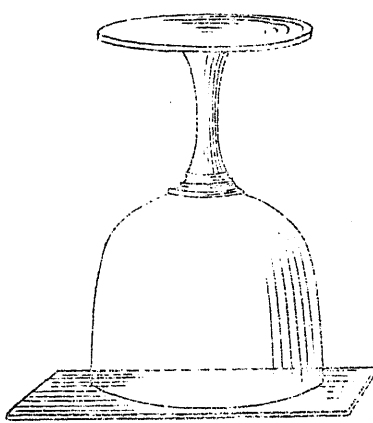
さて何故に筒様な現象があるかと申しますれば、御承知の如くに赤葡萄酒は水より軽く、水は赤葡萄酒

より重いのですから、上のコップの中にある水は、下のコップの中に入り、下のコップの中にある赤葡萄酒は、上のコップの中に昇るのです、丁度ランプの石油を入れるべき所に、半分位石油を入れ置いて、その上に水を注ぎますれば、水は下になり、石油は上になつて、二つの液體は立派に區劃されて居るのと同じ様なものであります。この水と赤葡萄酒とを交代する様子を、よく御覽なさい、餘程面白く御座いまして、交代が終つて後よく見ますると、水と赤葡萄酒とは、全く下と上とに別れて少しも混合物は出来ません。而して又珍らしいことには、水は二つの間のすき間を、上のコップより下のコップへと通るとき、少しも、外に溢れ出ないのです皆さんはこのとき水は、少しくすき間をも通つて、外にこぼれ出るだろうと云ふ御考へがあまりよし

ようけれども、決して左様ではありません、これは、

そのすき間のある所に於ける液體の有する、表面張力と云ふもの、作用があるからであります。

然らば、その表面張力とは如何と云ふことは、後に譲りまして、尙一寸申し述べたきは、こゝに用ふる厚紙は、普通に御用ひになる様な名刺の厚さ位で、充分です。夫から、水のあるコップ、即上のコップを

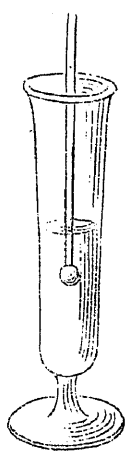
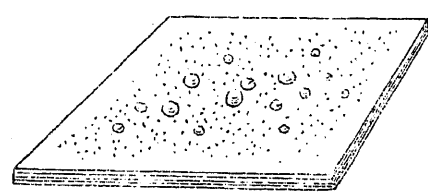


靜かに持ち上げて御覽なさい。コップに厚紙のついて居る間は、圖の如く紙の所は、押へずとも上の方だけ持つて、これ

を他に持ち行くことが出来ず。これは、空氣の壓力の結果でありまして、何にもむづかしい理由のあるものではありませぬ。空氣の壓力と云ふことについては、種々面白いこともありますが、御話しが餘り枝葉にわたりますから、御免を蒙りましてこれから表面張力と云ふことの御話しに取りかゝりませう。

一體、液體の表面は、恰もゴムを引き張りましたるが如くに、その面積が常に縮小せんとする傾きがありまして、つまり、液體の、何にも物にふれずに、自由になりて居ります所の表面は、常に收縮しようとするものであります。此作用を名けて表面張力とは云ふのであります。

この液體の表面張力てふ作用は、種々の仕方にて示すことが出来ます。先づ左圖を御覧なさい、硝子板に石松子をふり蒔き、その上に水を少しつゝ、注ぎます



ると、水は、一面に硝子板の上
に、擴がる御考へになりませ
うが、思ひさや、水は數多の小
粒となりて、硝子板の上に散在
します。又適當な器物に、橄欖油
の數滴を入れて、その上に靜か
に、アルコールと水の混合物を
注ぎますれば、油は器の底より
離れて球状をなします。尙一

例を挙げます
れば、圖の如
き器物を取り
來りまして、

アルコールを入れ、その中に細い硝子管を以て、油
を手際よく入れますと、油の大きな球状のものが出

來ます。これらの現象は、皆表面張力の作用によるのであります。

そこで、此度は前よりも簡單に出來させる面白く、とを一二行つて見ませう。皆さんは、金網で作れる細き目の篩を御存知でありませう、その篩の水を注ぎて御覧なさい、水は皆網の目を通りませうですが、次の如くにすれば、水は通りません。即ちパラフキンを融解して、篩の網の目をひたし、これを取りて一寸振りて、餘分のパラフキンを掃ひ去りませれば、パラフキンは、針金にのみ、附着して居りますから、網の目はふさがりません、よりに篩の底に紙を布きて、靜かに水を注げば、紙の上に浮んでも水は、下へと通らずに、その中へ依然として、存することは、恰かもコップの中に、水を盛れると同様であります。

又針をば、油に浸したる布片にて拭ひ、靜かに水面

に浮べますと、水中には沈まないです、これは針が、水の表面をやぶひて、沈むことが出來ないからであります、この時アルコールの一二滴を注ぎませれば、アルコールの表面張力は、水の表面張力に比べて小なるが爲めに、針は沈みます、表面張力に關して、諸氏が自分で試みられることの出來ることは尙ほ澤山ありまするが先づこれで筆をとめませうことに致しまして他日折が有りますれば又筆硯を拂うて見ゆることに致ませう。

日本化したる外國語

擊水生

以上擧げたのは、今日誰でも知り切つて居る語であつて、擧げ來れば、この様なのは、甚だ澤山である。これらは、始は外來語として皆つかつて居たのが、今日

では殆ど日本語同様になつて居る。オムレッツとかピフ
テキとかペースボールとかテニスとか謂ふ語も、今に
この通りになると思ふ。

そこで、これ等は、大抵西洋諸國からきて居るのだ
が、こんどは、一つ梵語即印度から来て居るのを并べ
て見やうならば、これは又其數も甚だ多い。それは、
佛法といふものが、頗る早く我邦に入り込んで来たか
らである。併し、では其能く知られて遣つて居るのを
少し許り出すことにして、一先これで措いて折を見て
他日御咄することにしやう。

卒塔婆。或は塔婆といひ、又塔ともいふのは略して
言つたので、印度語では、高顯の義である。

刹那。瞬間といふ意にて、即時の最も短き意。

荼毗。火葬のことであつて、印度では、物を焼く義。

である。

檀那。これは印度では施主の意味である。僧侶な

に、何が施して呉れる人を云つたのだが、今日で
は廣く主人といふ意にも使ひ、或は下の者が上の
人を呼ぶ一般の用語となつて居る。

達磨。これは法の意味だといふことである。

涅槃。不滅不生の意。

沙門。又桑門と書く。僧のことをいふ。

懺悔。悔ゆること。

斑。やはり梵語でまじつてゐる意。

魔。佛心を迷はす意。

佛。さどりの意。

夜叉。鬼の意に用ひてゐるが、もとは兇暴とか勇壯

どかの意である。

和尚。僧位の名だといふ。

伽藍。精舎の意。寺なり。

尙この他にも頗る多いが、要するに皆佛語である。
 以上の外、朝鮮語とか、蝦夷語も甚だ多く、は入て
 居るのであるが、これは、後日に譲るとして、こゝに
 は、たゞ大體を列舉したまで、ある。

(完)



講義

育兒學 (續)

中村 五六

○體溫。

幼兒が母體を離れて獨立の生活を營むに要する事柄
 にて、右に述べましたる三の變化の外に、また一つの
 變化即ち體溫の供給の變化があります。總ての溫血
 動物は、一定の體溫を保つこと必要でありまして、其

の溫度が高きに過ぎ、または低きに失するときは苦し
 みを受け、甚しき場合には死に至ります。此の危険を
 避くる爲に、人間の體は身邊の空氣が自然の適度に合
 はずとも、常に等しき溫度を保つやうに出來て居ます。

此の溫度は、健康なる大人にありては、攝氏三十七度
 (華氏九十八度)であります。それで、人間の身體に溫
 熱を生ずるの用意なきときは、速に冷却して夏季にて
 も不幸に陥るの結果を免かれませぬ。これを救ふの用
 意は、如何に出來て居ませうか。

體溫の起る第一の源は、食物であつて、これが發し
 また廣がるのは、消化、呼吸、循環によりて出來るも
 のですから、食物を給することは十分でなければなり
 ませぬ。されども神經もまた體溫を保つに著しき力を
 有して居ますれば、これが働きてゐますときは、體溫
 はいつとも高く、働かざるるとき、たとへば眠れる間は常

に低きものです。故に肌寒き時、外氣にさらして眠らしむることの結果は、いつも宜しくないことになります。眠れるときには、覺めたるときに比べて、一層溫暖なる被服を要するのは此の理に外なりませぬ。かつまた幼兒の年齢が少ければ少きほど、眠れるときと覺めたるときとの體溫の差は益々甚しく、従ひて注意の度も愈々増すべきものであります。

○新陳代謝。

前に述べましたる通り、幼兒は生れ出でしときは大變化を身に受け、従ひて、其の疲勞も一方ならぬのです。さるに其の疲勞も漸く時を経て回復するにつれ、自然に食欲も起るものであつて、自身の胃中に食物を得るときは、始めて命をつなぐ爲に消化の働きを起します。此の働きは幼兒の生活を支ふると、生長を遂ぐるとの、二重の用をなして居りますれば、これが必要

なるは、呼吸、循環の上に出で、居ると云つて宜しからうと思ひます。

斯く幼兒生れては、其の生命も生長も、全く外部よりの營養の供給に頼るものでありますれば、營養の器關は、各自に必要なだけの食物を消化し、また吸収するほどの發達をなして居なければなりません。されども幼兒の生れたては、其の腸も胃も幼兒唯一の營養たる乳を消化しまた吸収し得るに過ぎませぬ。殊に胃の如きは、其の形も唯筒狀をなして居る位です。

營養の仕懸は、既に備はりましても、なほこゝに食物の用をなしたる残りの不用部分即ちかすを排出するの用意が肝要です。此の用意に當れるものは、腸、腎臟、皮膚、肺臟でありまして、腸は糞便を排出し、また腎臟は尿水を、皮膚は汗汁を、肺臟は炭酸を排出しますれば、此等は各々其の働きをよくして、疏通十分

なるやう注意することは最も大切です。然らざる時は病を起し、或は死に至ることがあります。

第二章 初生児の取扱

○沐浴。

新に生れ出でたる幼児は、極めて寒に冒され易きものであります。是れ終始高き温度の胎内より、夏もなほ比較上寒き此の世に俄に移り来るによるのです。そこで、生れたる幼児が達者にて、呼吸も自由に出来るときは直に温浴を致させます。これが世に云ふ初湯です。此の初湯の際は、身體何れの部分も冷えざるやう、又不潔の湯が眼に入らざるやう、擦り洗ひて皮膚を損せざるやうに、よく丁寧に注意して洗ひますれば、身體に付ける血液胎脂も容易々離れまして、石鹼等をも用ふる要はなき位であります。然らざるときは、皮膚の皺、臂や膝の曲り目、耳又は眼其の他平かならざる

部分には、粘液が附着するのが多くあります。

又沐浴に使用する布巾は、最も清潔のものを選ぶべきです。往々不潔のものをを用ふるによりて、恐るべき眼病等を感じることがあります。故に清水を以て眼または口中を拭ふのは、これなどの危険を防ぎますれば、務めて行ふべきことと思ひます。

湯は清潔にして、其の温度は體温以上即ち攝氏三十七度乃至四十度を適度と致します。又往々生兒虚弱にして勢力をつくるの要あるときは、始め暫時湯中に入れたる後、其の温度を二三度計高むるを致します。

沐浴終るときは速に又柔に拭ひ乾かし、程よく暖めたる被服を被せ、また室内も暖かにしてすきま風など襲ひ來ぬよう注意すること肝要です。併し暖かならしめん爲に、盛なる火鉢の火などに近づかしむることは禁すべきことであります。

右の場合に用ふべき被服は、フランネルをよしと申しますれど、其の皮膚非常に柔なるか、又は暑き天氣などのときは木綿の類をよしと致します。そして呼吸に障りなきやう軽く緩に被せ暫時其のまゝに臥さしめて、幼児勢力の回復を待つのです。

○被服。

幼児の被服は軽きこと、柔かなること、又暖かなることの三要件を具ふべきものなれども、氣候時節に應じて變化せねばなりませぬ。製法は着脱き自由なるべく、身體を保護するに十分にまた胸や腸を抑壓せざるやう、手足の運動も自由なるやうに致し、殊に付紐にて胸を壓すが如きは最も戒しむべきことであります。

衣服を清潔にすべきは衛生上大切なことであります。幼児の衣服に於ては殊に重んずべき事柄であります。そも清潔とは新奇又は華美の意味ではなく、汚

れず垢つかざるの譯なれば、下に垢つきたる肌衣を着て表面美しき服を纏はしめ、これを以て清潔の趣旨に適ひたりとの考へ誤りなきやう致したるものです。然るに世には斯る誤に陥り、其の實幼児に害を興へつゝあるものも尠からぬやうであります。

又世間によくあることですが、幼児の感冒を防ぐ爲なりとて、夏冬の別なく衣服を數枚重ねしむるのがあります。是等は却つて幼児の皮膚を軟弱にして、感冒に罹ることは益々多くなりますれば、初より成るべく薄き衣服を以て育つるやう注意あるべきこと、思ひます。

總じて幼児の被服に付きては、専ら衛生法の命ずる所に従ひ、親の嗜好や時の流行などを顧るの餘地なきものと思ひます。こゝに婦人の方々に向ひて一たび省慮あらんことを希望致します。

此告依御注文の御方は婦人の子供を見たる旨御附記を乞ふ

本書は小學校賞與品及び家庭の讀本に最も適當せり

世の教員
父兄諸君
幸に愛兒

教育童話

の爲に紹
介の勞を
取られよ

第三篇 教育童話 菅丞相

附 丑 話の

丑の三十四年
一月發賣
定價金八錢
郵税金貳錢

東は奥州の果より此は筑紫の極みに至るまで、一縣一郡の間天滿天神の社なきはなし、天滿天神とは何ぞ、即ち菅丞相道真公これなり、道真公は延喜の朝に仕へて治績休明、勳功顯赫たりしことは人の略ぼ知る所なり、ことに其人品高く學術深く、千有餘年の後ちに至るまで、教師學童の爲めに尊敬せられ、その像を掲げて、戸々これを祭り、家々これを祀らざるはなし、此の如きに至る所以のものは、必ず其然る所あればなり、是を以て近來菅公を研究するもの漸く多く、日に月其書を見るに至れるは誠に喜ぶべき事共なり、然れども其書たるや大方君子の覽に供するもの、みにして兒童の爲めにするもの少なし、多隊散人つねに之を懷にし、こゝに筆を執て菅公の傳を起し、文章極めて平易に、兒童走卒をして一讀了解し易からしめ、且つ畫工をして、毎頁圖畫を挿し、一讀の下、菅公の人を爲りを想起して、自から感奮興起の心を發せしむ、ことに明治三十四年は菅公の一千九百零一年祭を行ふの事あり、公の事を研究するものは是より益々多からしむ、この際菅公の何人なるやを人に問まれて知らずといはざれば、耻孰れかこれより大なるものあらん、速かに一本を座右に備へて公の人と爲りを知れ。

附録には「牛の話」あり、短篇のお伽話にして、無邪氣なる所兒童の讀むに任せて亦一興

教育 第一編

同編 第二編 第四編

大黒天續編
大黒天續編
大黒天續編
大黒天續編

近刊

定價金八錢 郵税金貳錢
定價金八錢 郵税金貳錢
定價金八錢 郵税金貳錢
定價金八錢 郵税金貳錢

以下順次出版す

(中付の二)

發行肆 本日橋本區本町三丁目番地 金昌堂

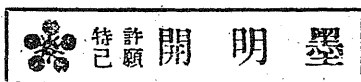
此廣告に依り御注文の方婦人子供を見たる旨御附記を乞ふ

同 同 全國發賣元

大改良 使用盡くまで腐敗固結等の憂なき受合

田口精爾發明製造

すらすらかけて墨色極めてよるし

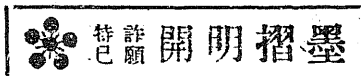


並 金四錢と金六錢
上 金拾錢と金拾五錢
同朱墨並金四錢上金拾錢
容器付參錢贈人小上下俱好次第

特許 硯函付 第一號金八錢第二號金拾參錢第三號金卅錢
懷中用。朱。茶肉入付長三角型各金二十五錢

大東 廣唐 本東 開明 硯函 諸爾 來高 等師 範學校 尋常 師範 學校 附屬 常市 諸大 公立 小學 校教育 諸大家
傳京 物販 石市 京市 之批 評を 承り 駁回 の大 改良 を 施し 今や 全く 實地上 の 最好 結果 を 得得 に 其 硯硬
馬市 町日 二本 丁橋 目區 市四 丁東 橋區 日三 丁本 橋區 地三 番地 區

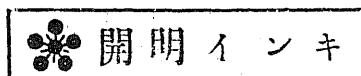
にして而かも溶け方の極めて易く使用し盡くるまで決して腐敗固結等の憂なく
又光澤の麗麗なる一目驚かざるものなし



定價 { 並金參錢と六錢
上金五錢と九錢

今般習慣上の爲めスリテ便利なる墨を製造せり此墨は從來の硯なれば勿論木。
ブリキ。ガラス。陶器製の硯面或は木板塗板上にても三四回すれば直に濃厚と
なり。子バリ。ニジミ等少なく其上床上。石上等に抛ちて決して碎くる事なき
故小學校等に特に妙用なり

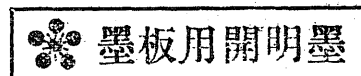
同 算盤 教育 用品 教科 用品 發賣 問屋



定價 { 小瓶入金參錢と金四錢
壹升金卅錢と金五拾錢

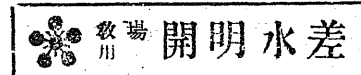
開明インキは光澤麗麗なる濃黒色にしてペン先のきびる憂なく走り方極めて輕
快なり特に毛筆に使用して書畫共に上等和墨に更に異なる事なき點に於て一層
高評を得たり誠に希ふ其東洋墨と西洋インキとの兩用を兼ねたる住良愉快の妙用
を御試み玉に人事を

金 利見合名會社本店
利見合名會社支店



定價 { 型墨板三兩實用分
通入金拾錢 硯の金
八錢 其他大小種々

日光爐火等にて暖めて用ふるときは如何に多量にても忽ちに使用出來其美麗に
して愉快なる色を呈すること往來墨の比に非らず



定價 金廿五錢以上種々

此器は片手に其取手を持ちたる儘拇指の作用にて一滴二滴隨意に水の出し止め
をなし得られ且つ衛生上水の腐敗を防ぎ轉覆の際水の溢るゝ事なし實に小學校
教場に一二個を用ひて唯一の品なり

(中付の二)



史傳

藤田東湖の妻里子

下村三四吉

故西郷南洲をして「天下真に畏るべきものなし、唯真に畏るべきは東湖一人のみ」といはしめたる贈正四位藤田東湖は、實に膽略識量兼ね備へたる近世有数の一大偉人なりけり。東湖の経曆事業及び感化等に就きては、何人も熟知せざるころなれば、ここに詳しう述べん要なし。ただ明治維新の大業に與りて力ありし諸人士が、東湖の交友中に多く、或はその門下に出でたりしことを言はば、足りなん。この一大偉人の妻里子の事蹟も亦傳ふべきもの少からず。

里子は、水戸藩士山口頼母の長女にして、文政十二年九月の生れなり。天保二年、年十七にて東湖に嫁しぬ。時に東湖は常陸那珂郡なる八田の郡宰を勸め、父なる山口氏は、また大里の郡宰たりしかば、人々稱養して、八田の御奉行はその名も高き秀才なるに、大里の御奉行より容儀うるはしき令嬢を娶らるるは、好一對の夫妻なりといへりどぞ。

容儀佳麗なる里子は、淑徳また殊に優れたりき。すでに東湖に嫁してより、能く家風に從ひ、婦道を盡くし、はさらなり、姑丹氏につかへて婉容愉色を失はずその尊敬親愛はまことの親にも増したりといふ。東湖の妹益子は、一旦さる士人に嫁したれど、故ありて離縁し、歸りてまた家に在りき。益子は、生れつき活潑にして、男まさりの氣象あり、且つ學問にも通じたれば、里子の氣がねは一方ならざりしかど、これにもよ

く接して、家内の和協を全ふしけり。

天保三年、東湖は江戸勤めとなりしかば、里子もこれに従ひ、長男小野大郎を擧げ、つきて七年には長女徳子を、十年には次男健を生みぬ。同十一年の春、一家再び水戸に歸り、その十三年には三男任生れぬ。越えて三年、弘化元年五月、水戸侯齊昭事によりて幕府の譴責を蒙ふり、東湖もまた職祿を褫はれ、江戸小石川の官舎に蟄居せり。この時、里子は家族と共に水戸にのこされしを以て、召使ひの男女には暇を與へ、姑の丹氏と共に宅を守り、ひたすらに冤罪の洗雪を祈りけり。然るに明年東湖は、更に小梅の邸に幽閉の身となり、水戸なる本宅も沒收せられぬ。よりにて、藤田氏の家族一同は下町の竹隈といふ處に下し渡されたるいふせき茅屋に引き移りぬ。當時家族十二人にして僅に乳をはなれたるばかりの幼児さへありて、生計の

困難、内外の憂慮は、尋常人の堪へ得べき所にあらざりけるが、里子この間に處して、操守愈固く、仰事俯育一も缺くることなかりき。

かくて、四年正月に至り、東湖は家に還ることのみ免されて、竹隈の宅に歸り、なほ謹慎の身にはあれど一家稍く愁眉を開きたる心地しぬ。また二年を経て、嘉永二年正月には、里子二女を雙生し、姉を孝子とよび、妹を梯子と名づけけるが、梯子は二十日あせりにして夭死したり。愁への中の樂しみ、悦びの中のなげき、どりかさねたる當時の狀情實におもひやらる。この頃より、東湖の身も、ややゆるやかになりければ、塾生を置きて學業を授けけるが、追々人數増加して數十人に至りしを以て、家事極めて繁多になりぬ。里子は、養育縫績の餘暇によくこれが給養をつかさどりて、懇切を極め、深く諸生の悦服を得たりき。

同嘉永四年十一月第四女功子生れ、翌年に及びて東湖の冤罪も全く釋けて、再び青天白日の身となり、本祿二百石を復せられ、二子健は大番組といふに取立てられき、九年間の憂き草の根も全くここに絶えて、めでたく六年の春を迎へぬ。里子を始め一家の心地いかに清々しく、よろこばしかりけん。

既にして、同年の夏、東湖は、俄に藩主齊昭の召に應じて江戸に赴き、御側用人の資格もて海防係を命ぜられ、祿百石を加増せられぬ、この頃、北米合衆國の使節浦賀に來りて修交を請ひ、開港攘夷の説盛に起りて、天下の騒きたとへん方なし。水戸にのこりつる家族は、悉く江戸に上りて、一家再び團圓の樂しみを享けしが、内外志士の東湖を訪問するもの日々數十人に及び、繁劇もまた甚しかりき。

東湖は、齊昭のおぼえ益々めでたく、安政二年の春

には學校奉行の職を兼ね、食祿六百石を領し、健もまた中興の小性に進められ、つぎて第五女清子誕生のよろこびをも加へぬ。

實に禍福はあざなへる繩の如し、かくよろこばしき事のみうち續きたる藤田家に、非常なる不幸は再び起りぬ。同年十月二日の夜、江戸に大地震ありて、東湖は母丹氏の身を救はんとて、梁下にうたれ、はかなくなりなき。一家の周章悲痛はいふもなかく、愚かなり。里子時に年四十一なりき。

東湖の長子小野太郎は、夙く夭死しければ、第二子健やがて家督を相續し、官職次第に進みて、元治元年には、側用人となりて政務に當れり。然るに、當時水戸には、正奸の二黨相分れて、兵を交へ、國內亂離の場となりしが、奸黨終に勝を制し、その十二月、健は祿秩第宅を沒收せられて、牢舎に拘はれぬ。里子は止

ひなく、姑丹氏と共に幼き女兒をも引き連れて親戚の家に奇遇せり。時勢の變遷のためとはいへ、悲惨の禍如何にかくも多きにや。二年を越えて、慶應三年には丹氏もまた老病にてみまかりぬ。涙の袖かわく間もなかりけん。

明治元年王政維新の世となり、恩光照さぬ隈もなく、健は免されて、家族の寄寓せし親戚原田氏の許に歸り何れも打ちよりて、往をなげき、今を喜び、悲喜交々に至りき。間もなくして、健は舊職に復せられ、新家を建てて家族を移しぬ。後に權大參事に進み、弟の任も權少參事となりて、兄弟共に心を盡くして丹氏を奉養し、孝、功、清の三女も追々士人の家に嫁せしめしかば、里子も大に心安くなりしにつきても、事あるごとに、姑の君のなほ居まざばといへることを、しばしくなりき。五年に及び、健は一家を東京に移して、職を

左院に奉じけるが、十五年の春再び茨城縣に轉任して舊里に歸りぬ。

(未完)

ローランド夫人 (ついで)

鄭越生

梅一輪一りんつゝのあたゝかさ……一陽茲に來復して、江南の一枝、漸く春風に綻びなんとす、嗚呼何等の美的ぞや、嗚呼何等の自然ぞや、處女としての夫人は、所謂漸く春風に綻びんとする、江南の一枝にて、ありけるなり、夫人の家庭は、所謂温かくして和かさ春風の如くにて、ありけるなり。

或は綠葉正に滴らんとする朝、また或は皎々たる空中月輪孤なるの夕、その兩親に侍して別墅に散策を試むるを以て無上の慰樂と思ひなせる夫人は常に、深き紗窓の下に鎖され、温かき翠帳の中に包まれ、絶えて

憂き世の濁りに染まらず、極めて美的に、また極めて自然に、その處女時代を過ぐせるなり。

かく樂しさが中に獨り悲しき憂き事は夫人の母君の病ひに胃され給ひしことは是なり。夫人はそを世にも悲しきことに思ひなして自ら湯藥に侍し極めて眞實に看護しけれど、命數に限りやありけん、一夜の露と消えにしにぞ夫人の悲歎云はん方なく、しばしは涙啣ち言ともにも下りけるが、竟には涙さへかわきはて、心をうしなひて、碯とその座に打ち倒れ全く知覺を失ひたりき。

世に恐しき病ひといふ惡魔よ、汝は何が故に雍々として春の如き夫人の家庭を襲ひしことをばなし、ぞ、樂しきさまに嘔りあへる小雀の群に投せられたらん碯のごとく何がゆゑに、しかく慘刻に夫人の家庭を襲ひしぞ。

世に恐しき死といふ惡魔よ、汝は何が故に雍々として春の如き夫人の家庭を襲ひしことをばなし、ぞ、袁として我が子に嘔つゝ、ある親鳥、怡々として黄なる嘴を、大きく開き、競り食はんとしつゝ、ある兒鳥の群に、發射せられて親鳥を射たらん散彈の如く何がゆゑに、しかく慘刻に夫人の家庭を襲ひしぞ。

この時夫人の健康は痛く衰へたれども、幾程もなく次第に恢復し、竟に再び和樂にして安靜なる生活に復歸しぬ。

既にして、夫人の妙齡に達するや、婚嫁を求むるもの引きも切らず、然れども、夫人は期する處やありけん悉く之を斥けて顧みず、依然として讀書三昧に逍遙す。知らず誰か夫人に群玉山頭に見ゆるの榮を得るものぞ、又知らず誰か夫人と手を瑤臺月下に携ふるの果報を有するものぞ。

茲に巴里の名族にモツシユ、ローランド、ド、ラ、ブ

ラチエーといふものあり、このローランドこそ夫人と
僧老の契りを結ぶべき前世の果報を享けたる人なりけ
れ、ローランドと夫人とは是より先き數年間交際を結
び互に往復しけるがローランドは夫人の淑徳と姿色と
に深く心を注ぎ竟に人を介して結婚を求めしに、夫人
の情またこゝにありければ、事忽ちに整ひ、夫人は二
十五歳にして二十歳の兄なるローランドに嫁ぎぬ、是
れ實に一千七百八十年にして革命前八年の事なり。
當時夫人は、良人どもに、アミエンに住み、いと
樂しく春秋を送迎しけるが、聽て一女子を擧げ、夫人
自ら哺育しぬ、一般貴族の風に從へば、乳母をして、
育児に任せしむるが、常なれども、夫人は、斷然風習
に反し、自ら之に任じぬるなり、此一事を以ても、夫
人が尋常の貴婦人に、一步を抜ける事を、察するを得

べし。

この後、リオンに移り、同じく樂しき月日を送りけ
るが、一千七百八十九年、端なく閃めきたる革命の炬
火こそ夫人及びローランドの境遇に一大變化を與へた
る機會なれ。

之を例すれば、一千七百八十九年以前の、夫人の境
遇は、猶ほ澹々たる湖上に、その之く所を縦にして、
悠遊自適する、一葉の小舟の如し、一千七百八十九年
以後の、夫人の境遇は、怒濤天を嘯ひの處、櫓將に
折れんとし楫また將に摧けんとする如し。

然り吾人は澹々たる激波の上に於ける、静けき小舟
として夫人を觀察し盡したりき、いでや筆を進めて澎
湃たる濁浪の上に於ける、雄々しき小舟として夫人を
見ん。

(以下次號)



文苑

システイーとドミノー (續き)

安井 てつ

システイーは澤山に色々の玩具を持つて居ましたが、ドミノーといふ玩具が一番好きでした。ドミノーと云ふのは色々、數の書いてある板を並べて遊ぶ面白い玩具ですが、システイーのは此板が象牙で出来て居ましたから、大層、奇麗で其上、高價のでした。或日システイーは一人自分の部屋で此板を並べて遊んで居ました。

すると父親がはいつて来て、

「システイー、お前は之が一番好きか、」

五十

と云つて頭をおなでなさいました。

「えい、大好きですよ、父親」

どにこゝしから父親の顔を見上げました。

「システイー、若、母様が今其箱を此窓から外に投げ出しなすつたらどうする。此奇麗な板が皆毀れてしまつたらお前は嘸、いやだらう、どうだ」

と何やら譯がありそうに云はれましたので、システイーは父親の心が分り兼ねて不思議さうに唯、顔を見つめたぎりだまつて居ました。

「けれども若、此箱を魔法つかひか何かゝ急にあの奇麗な薔薇の植つて居た淺黄と白の植木鉢にかへてくれたら、嘸よからう、そをしてそれを母様の御室の窓にせんの様にかざつたらお前は、嘸、嬉しからう」

「お、若そうならば本當にいゝでせう、どんなでせうね父親」

「本當にそうだ、けれども唯しようと思つた計ではない

くら善い事でも役に立たぬ、善い事をすればこそ初

めて前にした悪い事を取りかへすことが出来るのだ」

と云ひ乍ら父親は戸をしめて外に出かけて行きました。

システイーは此父親の言葉には何か譯があるに違ひな

いと思ひましたが能く分りませんでした、けれども其面

白いドミノも遊ぶ氣になりませんでしたから其日は

もうそれで遊びを止めてしまひました。

翌朝システイーは一人で庭の木の陰に腰を掛けて居ま

すど此時、庭を散歩してゐた父親が、丁度其處に來か、

りましたがシステイーを見て急に其前に立ち止り、

「システイー、父様は、これから外に運動に行くがお

前も一所に來ないか、そして其時ドミノを持つて

お出で、少し其玩具を見せたい人があるから」

と云はれてシステイーは直に走つて行つて自分の部屋

から大切な大切な玩具を持つて來ました。

「さあ父様行きませう」

とシステイーは大喜びで父親と一所に外に出かけて行

きましたすがやがて少しするとシステイーは立止つて、

「父様、此處に來ても仕方がありません、魔法つかひ

も何も居やしませんもの」

「なぜ」

「え、そんならどうして父様此ドミノの箱をあの薔

薇の植木鉢にかへる事が出来るのですか、え、父様」

此時父親はシステイーの肩に手をかけながら、

「システイー、誰でも本當に善い事をしやうと思ふ人

はいつでも二つ宛の魔法つかひを自分につれて居る

よ、一つは此處」

と云ひながらシステイーの額に手を當て、

「一つは此處さ」

ど云つて今度はシステイーの胸に手を當てました。

「父様、何の事ですか僕にはちつとも分りませんよ」

どシステイーは不思議そうな顔をして父親の顔を見上げました。

すると父親は笑ひながら、

「それではお前にわかるまで待つて居やう」

* * * * *

或日システイーの母親が自分の部屋に用があつて來ま

したが急にびつくりして、

「おやまあ、あの薔薇の花は……」

ど云ひながら急いで下に降りて來てまして、

「あなた一寸いらして下さい」

ど良人を呼びました。

「お、それはシステイーがしたのです、自分のお金で買ったのです、どう、これで、此間の悪い行を

償ひました」

ど云はれて、

「なに、まあ、そうしてお前のあの大切に居たド

ミノーの箱を賣つたつて、

あ、なに、い、い、よ、明日一處に行つて買ひ戻して來

ませう、いくら高價でもい、からねえシステイー」

ど母親は十分の同情を以て側に立つて居たシステイー

を見ました。

「どうだ、システイー、買ひ戻そうか」

ど父親もちつとシステイーの顔を見ますと、

「い、え、いりません、いりません、折角したのに」

ど云ひながら、ひしど父親の胸に抱き付いて眞赤な顔

をかくしました。

父親はしつかと其子を抱き占めながら、母親の方を向

いて、靜に、

「わ、御覽、此兒は今日初めて眞の嬉しさを知つた、善い事をした時の眞の嬉しさを、如何に子供でもすべき事は必ずさせねばならぬ、いくらつらい事でも自分の過で、できた事はどこまでもこらへさせねばならぬ、どうか此兒の死際までも此教は忘れさせたくないものだ、之が本當に私の願ひです。」

車のわだち

撃水 生

嘗て郷關を出づるや「業若不成死不歸」と歌ひあはれ、錦を着て歸らずば、骨となつて歸らんをまで盟つて遊學せし身の、脆くも紅塵萬丈の春に酔うて淺ましき身の成り行きを新聞雑誌に歌はるゝ者多かるなかに、雪を集め螢を友とせし古人に劣らぬ苦學をなして初一念を貫徹せんとする學生の時に吾人の耳目に觸る

る者あること、げに萬綠叢中紅一點どやいはん。

▲或年の師走の暮雨持つ夕方の空は、夜に入りて、吹き荒ぶ、北風に雪ど化り見るく二三寸が程も降積りぬ。

吾は背の程より、下宿屋の一室に閉ぢこもりて、消えのこりたる埋火かきおこしつゝ、火影淋しき孤燈の下に、読みさしたる書片つけんとする折しも、時計は一時を指しぬ、あまりに深してけりと思ひながら、いざこれよりがイデンの園ぞと支度にかゝれる時二輪の空車を引く音、表に響きつゞきて、車夫の話も聞へぬ。

「オーサムー、何だか、夜が更けるとべらぼうに寒くなつてきた、まるで、手の先が、ちぎれ相だ……」
時に、さつきからの問題チー、どうも、君の議論はどこまでも、タウトロチー（反覆法）としか考へられないね。それに、もーAが………」

「まう宜いさ。夫よりかも、明日の問題の答を考へ

て置うじやないか、でないど、またまごつくよ……」

車夫の話ども、思へぬ議論に吾は、思はず、窓の戸開

きて首さし出せば、折柄雪やみ空はれて、研ぎ澄まし

たる如き寒月一輪中天にかゝりて、ふり積れる雪と相

映じ白皚々たる一面の銀世界の中に、空車を引ける二

人の黒き影法師は、はや一二町も前に進めり、然も二

人の議論の聲は森たる夜中の寂寥を破つて、時々され

ざれに響き來りつ。

▲ある年の夏の夜、吾は芝なる友を尋ねての歸るさ樓

田御門の邊へ、さかゝりしに、例の車夫は空車を引き

て後より、しきりに乗車を勧めしかば、水道橋まで、

何程と問へば、二十五錢と答ふ二十錢ならではどて、

すたゝ急ぎ出せば、殆訴ふるが如き聲音にて、

「旦那、さう仰しやらすに、どうか二十五錢丈、や

つて下さいますし、實の、今晚は、まだ、御客様にあ

りつきませないので……おまけに明日は卅日ですから
少しでも入れないと、またお女將さんにやられますか
ら、ねーどうか旦那、……」



如何にも、其語のあ

はれさに、吾は言ふが

まゝに打乗りしが「お

女將さんにやられます

から」といへる彼の言

葉の解し兼しまゝ、車

上より、その誰なるか

を尋ねしに、

實あね、旦那、下宿屋

の一室を借りてるんで

お聴しい話しなんですが

……エ、そうなんで、

一昨年と昨年と二度士官學校の入学試験を受けたの

ですが二度ども、見んごと、落第しましたんで……尤
無理かも知れないんですが、矢張勉強が足りないの
です。今度は何でも及第したいんですが、またやり
損ふかも知れません。」

嗚呼、こも亦、眞の車夫にてはあらぬなり。身の述
懐を語りながら韋駄天の如く駆け過ぎて早くも、定め
の場所に来りぬ。さればとて約束の金に少し許りを添
へて、渡せば、數度禮を述べた楫棒取り上げて、神
田の方へと歸り行きぬ。吾は無量の感に打たれて、其
後影を見送りながら、暫は、其場に衝立ちつ。(未完)

新年の御歌

雪 中 竹

御製

この上にいくへふりそふ雪ならむ

たかひら高くなりせさなりつゝ、

皇后宮御歌

よの程のわらしはたえてくれ竹の

雪しつかにもあくるそらかな

東宮御歌

ふりつもるまかきの竹のしら雪に

世のさむけさを思ひこそやれ

東宮妃御歌

かさりなき君かちとせもこもるらむ

竹のはやまにふれるはつ雪

子らの遊び

東くめ

浪よりあくる

朝日かげ

魚やつらむと

蟹の子が、

浦の苦屋を

起き出て、

友よびかはし

急ぐなり。

* * * * *

朝露わけて

里の子が、

近き外山とやまの

木隠きかくれに、

さゝ栗拾ふ

聲すなり、

茸たけのこもありと

叫まごびつゝ。

* * * * *

浦和の磯に

打むれて、

あさり蛤

拾ふ子は、

日の暮れ行くも

しら波の、

歸るを忘れ

遊ぶなり。

* * * * *

夕日照りそら

岡のへに、

落葉かく子の

一むれば、

おのが家路に

吹く風の、

ちり／＼にこそ

急ぐなれ。

雪

全

人

まだ來ぬ春を

忍べとや、

しのぶが岡の

雪のあさ、

咲く事しらぬ

常盤木も、

匂はぬ枝なき

むつの花。

春 山

全

人

はの／＼と明け行く今朝の中空に

姿ふりせぬ雪の不二の嶺



説 林

兒童の道徳的訓練 (一)

兒童の義務の意識は其初め兩親の權勢の下に生活する經驗より生ずるものにて其惡事をなすを嫌ふは罰をおそるゝ利己的感情より來るものなり生後僅かに五六ケ

月位の兒童を叱咤して其泣をどゞめんとするもこれを沈黙せしむること能はずして却て益々泣かしむるに至るは尙未だ道德的感情を有せざるの證なり然れども漸次生長して其の將に爲さんとする事に注意を與へ或は爲したる事に就きて叱責するための父母の音聲容貌等の標徴の意味を了解するときは漸く善惡の區別をなし得るに至る罰の恐怖によりて父母に服従し始めたとときは則ち道德的感情を所有し始めたとときにして若し賞讃されんが爲め若しくは父母を喜ばしめんがために従順なるに至れば更に一步を進めて道德的感情を所有したるなり

兒童三四歳に至れば道德上許されたるもの禁せられたるもの爲すべきもの爲すべからざるもの等につき明瞭なる觀念を有するに至る而して其道德的法則は父母殊に母の上に存し母の禁せるところのものは惡にして其

許せるところのものは善なるなり一般に云はゞ認許と禁止とは善と惡との區別の標準なれば新らしき場合に接するときはその行爲は屢々變ず家庭に於て禁せられたるものも他家にゆきて許されてあればこれを行ふてあやしまず再び家庭に於て禁せられて又これを行ふを謹しむに至る實に兒童の道德は長き時日と大なる勤勞と忍耐とを以て買ふものにしてしかも種々の境遇によりて屢々破壊し去らるゝなり

最初は罰の恐怖によりて従順なれども同情の働くに至れば更に一步を進め悪行は父母の心を痛ましむることを知りてこれをなすを避け父母の喜ぶがために善行を爲す或る三歳位の女兒が小さく輕き荷物を持ちて母の前に立ち三四歩行きては後を顧みて母の笑顔を見んとせりといふ此女兒は自分に取りては大きく重き荷物を不平も云はず落しもせずを持ち行くは大なる功と感じ

只母を喜ばしめんがために其勞を惜まざりしならん斯くの如きは受働的從順即ち罰の恐怖よりなし得らるゝものにはあらざるなり斯くして父母に對する尊敬愛情におのづから其父母が代表し且つ執行する道德上の法則其物を尊敬愛慕するに至るなり然れども尙未だ其の道德的感情は純正ならずして只自己が敬愛するところの人が喜ぶところを盲目的に尊敬するに過ぎざるなり

兒童が他兒との交際に於て他の行爲が自己に影響を及ぼすことを知るときは更に一步を進めて道德上の法則を理解するに至る他兒が自己の玩具を奪へばこれが爲めに苦痛を感じ憤怒を起すことを經驗し又他兒が自己に信切にして玩具なせ分ち與へなば自己の幸福を増し感謝の念の生ずることを經驗す斯くして漸次に他人の行爲が自己の幸福に關係あるを知りて善惡の區別明瞭と

なり最早容易に命令に盲從せざるのみならず他人の行爲を見て善なり惡なりと批判するに至るべし然れども其批判は他人の行爲によりて喚起されたる自己の感情に従ふるものなれば純正なるものにあらず

經驗廣まり反省の力増すに従ふて兒童は行爲の影響は自他相互なるを知るに至り自己に關係なき被害者に對して同情を表し加害者を怒るに至る更に進めば自己の爲したる惡行を憎むに至る同情によりて被害者の位置に自己を置き自ら責め自ら咎むるの感を起すべし道德の進歩此段階に至れば兒童は自己と道德上の法則とを統一し單に外部の權力命令の爲め或は自利の爲めに善事を爲さるべく此自愛的ならざる感情は自ら咎め自ら悔ゆる苦痛と結合すべし此苦痛は直接正確にして且つ不變の道德的制裁たり

女子の職分

單念士

近來女子の教育と云ふものに就きましては教育者は日
日頭を痛めて居ります尤も中には反對を云ふ人もなき
にしもあらずでありますが實際上に於ては教育者のみ
ならず世人も次第に女子教育の仕事を進めて之に要す
る施設をなしつゝあることは事實であります之れは女
子と雖も男子と同じで數多の知識を授けられ又其の人
となりを訓練せらるゝとが必要なりと云ふ原則には誰
人も異論なきからであります又昔は男子と女子とは性
質の異なるが如く心性の作用も異なるものなれば其教育も
仕事も別でなければならぬと云ふてありましたが之れ
も今日では男女に係らず普通一般の教育を受けねばな
らぬと云ふことゝ女子の心性と雖も男子と同じく或程
度までの教育を受け得るものなりと云ふ原則には誰人

も異論なきに至りました又昔は女子の醫者、辯護人、圖
案者、説教者、學校教師、會社員、事務員其他特殊の職業
を取るものがありませんでしたが今日では此等の業務
に従事せる女子もでき斯々の仕事は到底女子では出來
ぬと云ふものは甚だ少くなりましたつまり女子と云ふ
ものは必ずしも従來の如く引込思案のみを取らずして
身分相當の職分を盡す爲めに身分相當の教育を受くべ
しと云ふ原則には誰人も異存なきことに至りました
然るに以上の原則を實現するには如何なる方法による
べきかと云ふことは誠に六ヶしき問題であります然れ
ども女子教育の起りと申すものは女子に必要特殊なる
知識と訓練とを與ふべしと云ふことより起りましたる
ものでありますから其方針も明なる次第でありまして
我國の女子教育も始めは必要と云ふことを驕ぎ立てた
様でありました然るに近年に至りましては其方針が少

しく見當違の方向に傾きたる様に思はれます即ち女子の教育は女子を裝飾する爲めに行ふものなりと云ふ様に過らるゝに至りそゝであります従て教育の方法も次第々々に此過りの渦中に陥りそゝになり始めましたかと思はれます即ち其教育といふものは身分と云ふことを考へずして猥りに社會上にて最も仕合せの位置にある女子に必要な事項を授くるかの様な弊があります即ち富人、暇ある人働かぬでも需要供給が思ふ通りになる人が氣慰みになすべき様なことを教ふる弊があります之も其の身分相當の人が學ぶならば宜しきことなるも之より劣りたる身分の女子が斯かることに多くの日時を費して居ると云ふことは誣ふべからざる事實でありますよ一此に於てか女子の職分如何と云ふ問題を攻究するの必要が起るのであります

女子と雖も何事をかなさざるべからずと云ふことは眞

理であります然るに近來の教育の状態によれば男子の教育は多く實用的方面に向けられ女子の教育は多くは裝飾的方面に向けられ殊に訓練の如きは男子には世に立つて仕事をなすに必要な品性を與ふることに注意せらるゝにも係らず女子には此點に缺くる所あるのみならず稍ともすれば見ばいを程能くすると云ふが如き表面的のものに陥るが如きことなきにしもあらずであります之れ等は共に教育方法上の一の過りと思はれます

(未完)



研究

臺灣に於ける古談

古談里諺の、兒童將來に對して感化するの勢力ある

は、争ふ可らざるの事實なり。吾が邦人の義侠に富

掲載することゝはなしぬ。

み、又は武勇に富むは、一に猿蟹、桃太郎、又は坊間

明治三十四年一月某日

町田則文誌

に流行する所の諸錦繪等、興りて力あることは固と

幼より父母又は家人につきて聞きたる古談乃ち昔話の

より明かなり。然れども斯の如くに、一方に莫大な

種類を問ひし結果は、學生三十九人につきて總數九十

る効益あると同時に、若し之を誤用するときは、亦

二件の種類を得たり。其他自身の所見所聞（例へば龍

更に一方に莫大なる弊害あることをも思考せざる可

山寺の前庭に於て猿戯を見たり、癡舁の厦新街に三疋

らず。今日支那國民の頑僻、固陋にして、徒らに舊

の鶏生れしを見たりといふ如き類）及び父母又は家人

慣を墨守し、文明の空氣をば少しも吸入すること能

より聞きたる教訓（例へば猥褻の言を發すべからず、人

はず、猥りに自ら尊大倨傲を以て任じ、國家の盛衰

と争ふべからず等の類）をも記入したるもの多きも、是

に關するの秋に際するも、一部の人民は馬耳東風を

れ本問の趣旨と相關せず、之を併せて調査するは却て

以て甘んじ居るも、決して無理にはあらざるなりと

本問との錯雜を致すべしと認めしを以て、之を省略す

信ず。余嘗て新領土に於ける教育事業の末班を汚し

ることとしたり。今合問の答案九十二種に就き、更に

たるとき、余が従事したる臺灣總督府國語學校に於

其古談の性質を知らんが爲に

て、支那人種を教育するに參考せんが爲に、左記す

第一 歷史上に有名なる古人の談話

る所を調査したり。兒童訓育の參考にもとて、茲に

第二 其他人物に關する談話

第三 動物に關する談話

第四 神佛仙人及び妖怪に關する談話

第五 植物に關する談話

第六 金石及び自然の現象に關する談話

の六項に分ち、其談話の要領を分類配彙すれば左の如し。

第一 歴史上に有名なる古人の談話

歴史上に有名なる古人の談話とは、正史に著はるゝ事實にして、他の稗史小説中の人物は、就令其人の假設にあらず、其事實の正確なるあるも、此に之を採用せざることを爲せり。是れ一には其家庭の教育が、如何程まで正當なる教育(支那人の所謂經學的教育)の應用を爲し居るやを實證せんと欲する爲なり。

一、韓公の頓智水甕に陥りし兒を救ひし話(案する

に韓公といふは蓋し溫公の誤なるべし)

二、關羽の話

三、舜の大孝の話

四、楚の秋湖家に歸るの途、桑田の婦に戯れ後其妻

の死諫を受けたる話

五、黃香九歳にして父の枕を扇げる話

六、孔融四歳にして梨を兄に譲りし話

七、孟母の能く其子を教へし話

八、吳猛親の爲に自身を蚊に咬ましめし話

九、介子推股を割きて晉公子に食はしめし話

十、趙盾は夏の日なり趙衰は冬の日なりといふ故事

の話

十一、燕竇山過を改めし話

十二、唐の狄仁傑の話

十三、宋の秦檜の話

中に就きて孔融の話は二人同伴、吳猛の話は四人同伴

なりしを見れば、此二話は最も人口に膾炙するものと知らる。但是等の史談は教育の結果として、生徒が讀書の間に自得せしもこれあるべし。然れども、史談中如何なる事實が臺灣土人に、最も觀感の力を與ふるかを知るには、亦此自傳の結果をも是認するを妨げざるべし。

今之を倫理の目的よりして分類すれば、

- (イ) 孝に關する話 三 件
- (ロ) 忠及武に關する話 三 件
- (ハ) 悌に關する話 一 件
- (ニ) 貞に關する話 一 件
- (ホ) 慈に關する話 一 件
- (ヘ) 仁に關する話 一 件
- (ト) 人の性行を見得る話 一 件
- (チ) 改過に關する話 一 件

(リ) 不忠に關する話 一 件

とす、而して教訓としての趣旨より言へば、

勸善的事實 十三分の十二

懲惡的事實 十三分の一

なりとす。 (未完)

倫理管見

石井國次

こは昨夏予が某教育會に於て演述せし原稿の一部なり今之を篋底に探り少しく訂正を加へて本誌第一號に於ける專説の續となし大方の是正を仰ぐ

第一 快樂主義について

快樂主義殊に利己的快樂説を採る學者は人は皆自己の快樂を以て目的とするものであると申します、ところが近來實驗心理學の證明するところでも人は皆自己の快樂を求むることが自然であると申しまして彼に目的

といひ之に自然といふの差はありませうけれども要するに人は皆自己の快樂を求むるものなりといふとに於ては一致するもので此點に於ては利己的快樂主義を以て至當なりといはねばなりません。されど彼の極端なる利己論者といふべき支那の楊朱などの説の如き「わが髪の一毛一本を抜かば以て他人に利益を與へ他人に安寧幸福を得しむるを得といふほどのことありとも予は予の髪を毛を抜かざるべし何となれば予を聊にても傷くるとは予の快樂予の利益にあらざればなり」といふこととさに至りては大なる誤といはねばならぬ

なせなれば人間の慾望といふものは決して下等動物なぞのごとく單純なるものでなくて極めて數の多い又極めて複雑なるものである即人間には單に耳目鼻口の謂はゆる感覺上の慾望即肉慾獸慾とかいふもの、外に愛とか同情とかいふ様な精神上の慾望といふものがある

そこで快樂といふことは心理的にいへば此慾望が満足せらるゝことの状態であつて即精神上的の快樂といふものは精神上的の慾望の満足せらるゝことである

ところで前の楊朱の例にあつて見れば今僅に毛筋一本の痛さをこらへれば人を救ふことが出来るといふやうな場合に之を救はなんだならば彼は自分の感覺上の快樂は毫も損せられずとも彼の精神上的の慾望は決して満足することはあるまい即彼は感覺上の僅なる満足よりもより大なる精神上的の苦痛を受けねばならぬのである

即結局は自己の快樂にはならぬのである(病的のものならば兎も角通常の人間にては斯くまで同情心のなきものはあらじ)

そこで予は利己的快樂論者が人は皆自己の快樂を求むるものなりといふことには賛成するが只一步進みて其自己とは何ぞや自己の本體如何と研究してはしらので

ある利己論者の多くは此自己の本體の研究を怠つて居り、はせぬかと思ふ

第二 直覺主義につきて

然らば自己の本體とは何ぞやといへば上に述べた感覺上の慾望と精神上の慾望とを兼ね有して其満足を求めつゝあるものと答へるのである、即自己はあらゆる慾望の塊である

直覺説をとる倫理學者は人間には先天的に良心といふものがある或事柄に當りて之は正彼は不正と直に判斷するものが生れながら人間にある之が萬物の靈長たる所であるといふて居る、ところが此直覺論者は大抵此良心に對して邪念といふものゝ存在することを認め居る、大我に對して小我といふものが先天的に人間に存在すといふので即予が自己の本體を直覺上の慾望と精神上の慾望との二つに別つのと同一である

けれど只此説に不十分といふべきは何故に精神上の慾望が高等で感覺上の慾望が劣等であるか何故に一方に良といひ他方に邪といひ彼に大といひ之に小といふかの説明の足らぬことである、否つかぬことである

吾々が汽車に乗り居りて一時間何哩といふ速力で進みつゝあるけれど自分と同じ室内にある人の顔や室内の裝飾などに目をつけて居ては汽車が走るか走らぬかわかるまい、そこで一寸目を窓の外に放つて電柱の飛ぶのやら人家の走るやらを見て始めて汽車の走りつゝあることを知るので同様に、只人の性質人の慾望のみを研究したとて其間に高下善惡の別がある筈はないつまり他のものに比較し他の物を標準として始めて其間に高下善惡の別の出来るのである然らば其標準とは何であるか即社會である

第三 社會の組織は人性必然の結果なり

渾圓球上上下下幾千歲古今東西の歴史をしらべて見ても人間が此世界に純然たる孤獨の生活を營みたる事跡はない蓋わり得べからざる事なのだ譬ひ首陽山に隠れて薇を食して生活すとも身を雲水に任せて富貴利達を忘るるとも直接なり間接なりに社會に影響し社會に影響せらるゝことは到底免るべからざる數であつて今假りに人間が此世界に於て皆孤立して棲息すとせんか人類の繁殖する道理はないし愛とか同情とかいふ慾望の達せられざるは勿論其他あらゆる慾望は決して満足し得らるゝものでないなせならば其孤立せる人類相互の間の競争といふことは無いと假定しても更に他の動物との衝突もあるべく而も猛獸のごとき鋭爪と毒蛇の如き齧牙とを有せざる人類は忽にして彼等の餌食となるのを免れないことは明瞭であるからである

そこで斯様いふことになる人間といふものは理論上實

際上自然に必然に社會を成して生存すべきものであつて人間は社會に於てのみ彼等の慾望を満足することが出来る人間は社會を離れて孤立しては一日も生存し得べからざる者である社會は人間の走るべき唯一の軌道である古哲アリストテレスが人間は社會的動物なりと喝破せしは實に千古不磨の名言である (未完)

幼兒保育につきて

東 基 吉

そこで此間一の組の子供に板并べを致しました所が當り前ならば平面に并べなければならぬ板をば、こう云ふ風に、立てゝ山とか山脈とか云つて居る、夫から又其側にこんどは板を平面に并らべて、汽車と云つて居る。當り前の原則に従へば、これは許されぬのである、一を立體にして立て、一を平面に并べるのである

から、其方法は間違つて居る、併しながら子供の考から云へば、これが反つて子供らしいのである。夫を何でも表出の方法が違ふからと云つて、無理に平面的に并べさせぬばならぬと云ふのは、即大人○○○○の心○○○○を以て、子供○○○○に強ゆるのである。昔の地圖で見ても、開けない時の地圖は、山を山なりに立て、書き、湖水は平面的に書いて居る。今日吾々の目から見れば不都合と云ふのであるが、昔の人は夫でよく分つたので、つまり子供も此方法が反つて分り易いのである。然るを板はレベルがさう云つたからとて、何でも乎でも平面に并らばさせぬばならぬと云ふのは、即子供の自然に反したやらせ方ではありませぬか、子供の自然の發表に従ふと右の様に種々面白いものが出来るので、此間も分室の子供に私がやらせたのは、積木も板も紙も粘土も凡てを一度に與へてやらせて見たのです。さうする

と子供は一方では積木で以て家を造り、一方では板をたて、塀を作り、或は紙で旗を拵へて喜で居るのです。

抑々吾々に顯はれる自然の物體は、一方から云ふと體も線も面も點も皆一樣に具へて居るので、恩物の材料はつまり是等に適合する様に出來て居るのでありますれば、何も板であるから箸であるからと云つて、必ず平面的に併べさせなくても、例へば此机でありますれば、板で以て机の面を拵らへ箸で以て脚を拵らへる様に、之を交せ合せて、種々にして使つて宜しいのみならず、反て夫れが發表の自由を得しめるのでありますし、又夫をさうして使用する中に若し必用がありますれば、子供は立體から、だん／＼抽象に至る具合を知るのであるうと思ひます。

故に子供に材料を予へるに積木ならば積木丈を與へて、此れで積木丈の物を造らせるとか又箸丈を使つて

此れで箸丈で出来る物を並べさせると云ふ様に、子供に一種類のみを限つて、予へて、其一種類丈の物を、弄ばせると云ふのは、つまり、吾々の思想を以て子供の思想を制限した者でありますまいか、種々な物を一度に與へて、何でも思ふ様に、種々の方面に、使はせれば、子供は子供らしい思想を以て、併も自然に合つた方法で發表するのです。其所で今申上げた要點はつまり、恩物の材料は其思想の發表の四の形式に従つて出來て居れども、それを一つ一つの形式に限つて用いさせ様と云ふのは、無理でありますから、もし子供の自由に任せて子供の好いた通にやらせ様と云ふに歸するでありますから、さうすれば子供の思ふた様に發表いたしますから、さういふ工合にやらせるべきだと云ふに歸するのであります。

それから論點は違ひますが、幼稚園の重なる所は子供

の社交的本能と云ふ事を指導するにあらざれば、今日の様な工合に、一人々々に同じものを與へて、三十人が三十人まで、皆一人一人に同じ物を造つて居ると云ふ様に、せずに多數の子供が幾組にも別れて一組はあらの方で粘土で山を作り、一組は積木や紙で汽車を拵へる者もあり、一方では、門を拵へ或は隧道を拵へる者があり、さうして、皆出來た所で相倚つて、一の物が出來上る、即其れを持寄れば、全體の景色が出來て或は山に橋の懸つたるものがあり隧道があり、一方にステーションに旗を立てて居ると云ふ者が出來て誠に面白い。さうすれば子供の共同的の仕事で、皆が寄つてやつて、一の仕事成就する、これは敢て私の新發明の考と云ふのではないので、フレイベルが言つて居るのを御紹介したのであるが、それは今日の所では、行はれて居らぬのですから、其れをやることなどは頗

る宜い事であらうと思ひます。そうすれば、子供の共同性を導くには最も適切だと考へます。

それから少し脱しまして、童話の事になります、此事は會員乙竹君が前に出てお話をして下さる筈でございましたが、出られませぬので、其原稿が教育の第五號に載つて居ります、至極有益の事と思ひますから御一讀を願ひます。そこで私はもう一つ他の側のお話をしたいと思ふ、童話に就ての教育上の價值其他の事は餘程前から既に認められて居る事ですが、童話の目的は子供の想像力を高める事と難かしい道德的事を具體的に子供に判り易く知らすと云ふ事の二に歸するのでせう。或る論者は罪惡などと云ふ事は實際其人が苛烈な性質を持て居るからやるのではなくて寧ろ想像力が足らぬから犯すので、つまり、其人が他人の位置に身を置いて他人の位置を想像してやる事が出来ぬからだ

云つて想像力の足らぬことに歸して居ます。然らば想像力を高めさへすれば、どう云ふ童話でも宜いかと云ふにさうはいかぬ。童話の材料の中に選擇はせねばならぬ。其所で或る學者は、童話を選択するに、子供らしい義務と云ふ所から導きて、子供には子供相應の義務、即ち父母に對する義務、兄弟に對する義務、婢僕に對する義務、それから、動物に對する義務と云ふ四から選擇すると云ふ標準を示して居ります。今日の實際の有様から見ますれば、標準は多くは或は忠義であるとか、或は國家であるとか、博愛であるとか、随分澤山な方面から、擇んで居ますが、學者の説はさう童話の數は多きを要せぬ、フレイベルの云つて居る所に依つても子供と云ふものは、元來一つの話を何度でも、聞きたがるものである、故に種々面白いものを取替へ引き替へするに及ばぬと云つて居ります。

又一方から言ひますと道德の根原と云ふものは愛と云ふものに歸する、其他のことは、この根本の愛が種々の對象に従つて種々な形式を取つたまで、ある。即子供

の時に愛の情を深くして置分ば、種々の目的物が出るに從つて、夫夫に對する道德の仕方を悟るので何もさう、子供の時に一度に種々の方向に發生させる必要があらうか、眞愛を一つ發生さすれば宜いではないかとも考へられるのです。ですから此方面から考へましても、童話を撰ぶに種々多くの、而も難かしき標準からするに及ばないと考へます。

それから修身話と庶物話は、一方では、修身の話を授け、一方は庶物の話を授ける、これも注意せねば、幼稚園は智識を授けるを目的として居ると云ふ非難を受けるのです。智識から言ふならば、庶物は悉く授けねばならぬが、さう云ふ事は要らぬので、つまり、此二

つは殆ど分つ必要もない様なもので、庶物話といつても自然に童話の中に授ける事も出来るのです。

然らば話の結果を收むる其方法は如何と云へば子供には子供相當に話さねばならぬので熱心と云ふ事も要れば、又言葉の巧も要るが更に又子供の思想を錯雜させぬと云ふとが必要の條件だと考へます。夫は種々な應用の様なとや道德的の抽象などをやつて居ると、甚子供の思想を錯雜させることがあります。フレーベルが其書物に於て、子供に話をするに、必應用などは要らぬ、それから又道德的に訓言を其話の中から引き出す事も要らぬ、子供に話を聞かせれば、子供は自然に其中から取出す、其中の道德的思想を言葉添へて云はぬでも取り出すと云つて居りますが、又アドラーと云ふ人は話を面白く聞きよく子供に與ふるには話の中から道德思想を取り出して、子供に授けたり、又話を

聞かせて後で、道徳的意味だけを抽象する、さういふ

事はいけない、又話の目的を道徳の一方にひければ面

白くなくなる、子供には子供らしき點を存して置け、

猿蟹合戦の話ならば、其中から子供に道徳の事を纏め

て言つたりする、さういふ事は幼稚園の子供には要ら

ぬと云ふ様に云つて居ります。

それで今日申上た事は甚錯雜して秩序もござりませ

ず、夫に時間がござりませぬで、甚急ぎましたから、飛

ばしたり何かしましてお判りにくうござりませうが、

要するに保育は子供の自然に従ふべきである、然るに

今日は子供に望むに大人の考を以てする事が多い、談

をするにしても、遊戯をするにしても、はた、又恩物

を弄ばせるにしても、頗大人の心を以て解釋して居る

事が多いですから、今少し自由に、子供には子供らし

くやつてはどうかと云ふ事に歸するのでござります。

甚御清聴を煩はしました。

は き よ せ

清水 鶴

唱歌は幼兒の最も好むものにして教育上亦最も必要

なるものなれども十分の注意を以て歌はしめざれば唯

狼りに怒聲を發して害を殘すに止むべければ其の適當

なるものを撰び宜しく相應に練習せしめんこと必要な

り一時流行の唱歌例へば鐵道唱歌の如きは興に乗じて

殊に怒聲を發すること多し又此等の歌詞を下品に造り

かへてうたへるものあり何れの邊より出でたるかは知

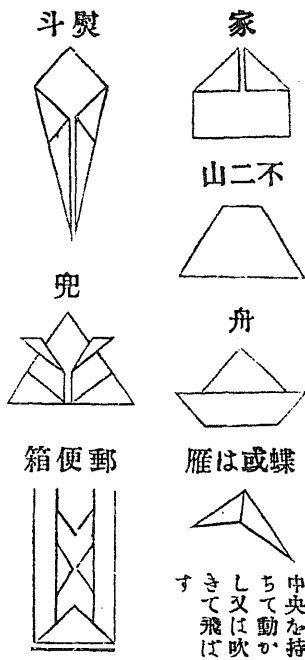
らぬと幼兒に聞かしむべきものにはあらざるべし

紙を摺みて鶴香箱等を造るとは昔より廣く行はれし

遊びにして最も面白きものなれども其の摺み方複雑な

るもの多く幼兒にはむづかしといふ人ありされど必し

も困難こんなんを忍びて教ふるを要せず幼児の想像力さうざうりよくは甚だ盛なるものにして唯一片の紙いつぺんを與ふれば自ら種々様々のものを造るを以て其の都度つど十分之に同意を表し與ふる時は其の工夫くわふする所實に廣くして大人の遠く及ばざる所なるべし今實際じつさい幼児の工夫くわふしたるもの數種を左に掲ぐ



何れも正方形せいほうけいの紙を以て造りたるものにして三年半以上五年以下の兒の工夫くわふなり

此等に用ゐる紙は色を識別せしむる點よりいふも興きょう

味あじを益す點よりいふも千代紙ちよがみ色紙等いろがみをよろしとすれば之を得がたき所にては自ら染めて與ふるも面白かるべし

染め方の簡單かんたんなる法は

アニリン色料をアルコールにて溶とけし後適宜てきぎに水を和す

錫酸ソーダたがくを水に溶す

右の如くして染めんとする紙を塗ぬり板の上に延べ先づ錫酸ソーダ水たがくを刷子はけにて引き直に色料を刷子はけに含ませして其の上に引き乾かして用ゐる錫酸ソーダを引くは色の剝はく脱だつせざる爲なり又礬水ばんすいを用ゐるもよろしアニリン色料の中には種々好みの色あるべし

おみやげこれは幼稚園にてなさしむる手技しゅぎの名のやうになり居れり其の名のもとを尋ねれば幼兒自ら造りたるものを父母の許もとへおみやげに持参するといふ意よ

り出でたる如くにして理は甚だよろしけれども今は往

々其の意義にのみ拘泥して幼稚園にても日々必ず持ち

歸らしむることゝし家庭にても日々必ず持ち来るもの

と思ひ甚だしきは其の美麗にして細工の細かきを競ふ

とかさけり斯の如きは幼児ありて後に遊具あるを忘れ

たるものにして保姆が大半造りて與ふるにせよ幼児に

不適當なる仕事をなさしむるものなれば害を及ぼすこ

と少からず其の主なるものと思ふを左に擧げん

猥りに複雑なるものを好み簡易なる仕事に満足せ

ざることを

眞の快樂を知らしめず且つ徒に手技の困難を感ぜ

しめ勤勉の念を開塞すること

想像力の發育を妨げ獨立心の伸長を害すること

又保姆にありては徒に手技の準備に忙しく従つて知

らず識らず必要なる研究を疎になすの嫌を生ずるに

至るべし

幼児を保育せんには愛を本とせよとは誰もいふ所な

れども猶ほこれに加ふるに勤勉熱心を以てし一度許し

たること又一度命じたることは必ずこれを實行せしむ

るの覺悟なかるべからず然れども決して理窟づめにせ

ず唯其の精神を保たんに注意すべし



雜 錄

公 德 の 養 成

如何なる點より見るも、我邦人の公德に缺け居れるは事實として疑ふべからず。東洋の君子國と自稱せる我國にして道德上この至大の缺點を有せるは、まことに慨歎の至と曰ふの外なし。近來に至りて等しく、この

點を自覺して、新聞に雜誌に、或は演説に、至る所に唱導せらるゝに至りしは、頗る喜しき現象なり。讀賣新聞は過日來「公德の養成、風俗の改良」といふ題目の下に我國に行はるゝ種々の惡風を連載して世の注意を促せり。學校に於ては、これ等の材料を取りて生徒に教授すべきは勿論、家庭に在りても父母たる者よく注意して其子弟を誡められたるものなり。

禮節作法教授の注意

禮節作法は人生の飾り物にあらざして人世社會に必要なる道德の外表面なり。されば、苟も兒童生徒に禮節作法を教授する以上は、必ず之を實際上に實行せしむるを要す。故に又兒童生徒に教授すべき禮節作法は日常彼等が實際上に實行し得べきものを外にして一生のうち會々起り得べきことのみを教授するが如きは蓋し甚だしき誤謬といはざるべからず。今日に於ける禮節作法は、まことに、やかましく貴人の前にて實行すべき如きものゝみに偏して教授せるを以て、兒童生徒は

禮節の時間のみは、殊勝に嚴肅に動作すれども、其時間過ぐれば忽ちもとの木阿彌の隨分無作法の極を演じて顧みざるものあり、或はまた其時々の時間に於ては十分法に合つて起居振舞ふものも、比較的責任の明かならざる社會公衆の中に於ては匹夫もなすを耻づる無禮不徳を行ふて顧みざるあり、教師たる者も此邊一方向に無頓着なるが如し。

要するに今日の禮式教授は殆ど一個の飾物として教授せるが如く換言すれば實に形式の形式たるが如き觀あり、吾人は今少し、生ける禮式作法を授けて、眞に身を治め、人に對し社會公衆に對する道德の外表面たるしめんことを望むものなり。

婦人の袴

學校生徒を始め教員に至るまで、近來漸く袴を着用することの流行しきたりしは、とにかく、衣服改良の一着歩として喜ぶべき現象に相違なしといへども、元來衣服には、それ〴〵年齢に應じて、模様なり仕立方に

於て差別なかるべからざるものなるに、今日流行の袴
を見るときは、三四歳の幼稚園幼児より五六十歳の老
婦人に至るまで、これかれ殆ど一様なる蝦茶色の一點
張どきでは、其實に於ては宜きも、其外形に於ては、
いさゝか感服の出来ざる次第といふべし。今すこし模
様色合造方等に於て、子供には子どもらしく老人には
老人らしき袴のできざるものによ、こゝ衣服改良家の
考案を希望する所なりと、ある人は語られたり。

婦人の自轉車と蝙蝠傘

自轉車乗用によりて、衛生上健康上にいかなる影響
あるかは醫學家の考慮に待つこととし、これからの我
國婦人たちも、これ位の運動をなさではかなはず。
然しながら、これと同時に、吾人は専門の自轉車乗と
なり了りて、外見に見ゆる滑稽の風を演ずるに至らざ
らんことを望む。如何に巧妙、斯道の達人に譲らねば
とて隻手にハンドルを壓へ隻手に洋傘をさし行く風
采の如き、人をして寧ろ綱渡り手品師にてもあるかの

如き感を抱かしむることありて、あまり感心のできぬ
咄なり。イツンのこと西洋のボンチット様のものを戴
くことにしては如何にや、敢て一考を煩はす。

兒童に發表の機會を多くせよ

一體に兒童は其内部的活動力を外部に發表せんとする
ものにして、遊戲に勞働に、言語に唱歌に、凡そ、あ
らゆる方面に向つて其内的活力を發表せんとす。巧
なる教師は、よくこの性質を利用して、以て彼等の性
情を完成せしむ、教育の秘訣は即こゝに存するなり。
無識なる父母は、八釜しとて、無邪氣なる彼等の動作
を壓伏し、以て從順ならしめたりとなす、彼等の天性
は、これに依て遂に損害せらるゝなり。

兒童をして亂暴ならしむることは、まことに宜しから
ざることなれども、教育に於ては、今すこし、彼らに
發表の機會を與ふるを要す。今日の學校教育は一から

十までも、つめ込み主義なり。もとより授くる學科の數多くて致し方なしといはんもさりとては兒童の天性にそむけりと考へられざるを得ず、まことに彼等にとりて、可愛相なる極にあらすや。

幼年唱歌

幼年の兒童をして、無意味なる唱歌を歌はしむるは、いかに彼等が唱歌について、趣味を有するにせよ、甚だ有害なることは明かなり。これに付きて、近來彼等兒童に適する様にとて卑近なる唱歌を造られたる人も少からず。併れども、吾人の眼より見るときは、其曲なり其詞なりは尙以て完全ならざるもの多し。音樂者に教育思想乏しく、教育家に音樂思想皆無なる今日、到底その完全を望むべからず、吾人は今日の音樂教師に向つて、たゞ樂器の使用を授け唱歌を歌はしむるを以て、事了れりとせず、更に進んで、教育學を研究せられんことを望むと同時に、教育家たる人に向つても大に音樂の理論と實際とを研究せられんことを望むも

のなり。

有毒玩具の發賣禁止に付きて

別項記すが如く二種の玩具は、有毒染料使用のかどを以て今回發賣を禁止せられたり。元來幼兒は何品たるを問はず、其手に觸るゝものは悉く之を口に持ち行くものなれば玩具に用ふる染料のごとき、とくに注意を要すべきものにして、父母たる人も、玩具を購求するに當りては、又大にこの點に注意すべき筈なり。今回右二種の玩具の發賣を禁止せられたるが如きは最も當然のことなるが吾人の知れる所に依れば、この他に尙數種の右に類せるものあり。要するに、金銀粉を散布せる安價の玩具黃赤青等の毒々しき濃染料を施せる品はなるべく幼兒の手に觸れしめざるを可とす。

清客の意氣

吾會て友人三人と相環座して語る、中に一人の清客あり。談は教育上の問題より進んで清國現時の國情に及びしが、一友彼に語りて曰く、最近報ずる所に依れ

ば、米國發見の實はコロンブスに在るにわらずして、
反つて貴國人に在りと、これ豈偉大なる貴國の名譽に
わらずやと。清客無然として曰く、嗚呼眞に然るか、
これを歴史に徴すれば、發見發明の名譽は數千年の昔、
弊國悉く西國にさきながら得たり、然れども、つら
つら觀すれば此の如き名譽は君今語る所のものと同
しく名譽の片影に過ぎず、語を換ふれば、空虚の名譽
に過ぎざるなり。歴史家は好んで過去の名譽を回想す
愛國の士は偏に現在を思ふ、君れ夫歴史家たるなから
んや。今や弊國難を世界各國と構へ社稷ために危から
んとす、まことに、この難關を脱し幸に獨立を稱する
に至らば希はくば弊國の名譽と稱するに足らんか。
眉昂り氣激し、語り終りて正氣の歌を歌ふ、其聲嚙朗
として其音悲愴、そゝろに人をして斷腸の思あらしむ。
清客性は戴名は翼輩字は元丞、容貌俊異眉目清秀年齒
まさに二十有六、今現に東京專門學校に在りて政治學
を研究しつゝあり、將來大に故國の啓發に盡さんと

すといふ。幸に自重せよ、好個の少年。

如是我聞

▲一體が、男の子と女の子とですから、無論生れたら
から萬般の動作が違ふのは、あたりまえのことである。
従つて其教育法も夫れ々之に應じて違つて來ねばな
らぬのである。併しながら、どうも、今日のやう方は、
あまり甚しく、これを區別しすぎはしないか、幼稚園
や尋常小學校の初めなどはさほど區別しなくても宜
いのに、しきりと其區別を立てたがる。我輩などの思
ふには、此邊の男女兒は無論のこと、尙すつと上の方
でも、今少し之を接近せしめて宜しからうと思ふ。
男では、この位のことば許してもよいが、女には許せ
ぬといふ様な點は今日随分多い様に思はれるが、禁じ
る點も許す點も、今少し兩方を近づけるべきものであ
らうと考へる。これからの女子はどん／＼獨り汽車に
も汽船にも乗つて旅行にでも出懸けることのできる様
に養成しなければならぬ。然るに男の學生には修學旅

行とか或は一人で遠足することなど、しきりに奨勵して居ながら、さて女子が旅行でもやると、大變に不思議がる如きは頓と合點が行かぬではないか。と、女子教育に深き経験ある大家が記者と對話の節、語られた事があつた。

▲女子教育が進んだとは云ふものゝ、考へて見れば、まだく程遠い事だ。そりや、形の上から云へば、女學校も大に殖えた、女教師も初等中等ともに増したに違はないが、併し女子教育に付いて意見を發表でもして見ようと云ふ婦人たちは、まだ。甚だ少いではないか、十九世紀は仕舞つて二十世紀の新舞臺が開けたのに、何時までも、お定りの一人や二人の婦人の獨舞臺で以て婦人の言論界の獨占と來ては、我が婦人界の爲にまことに心細く感じられる。或はナマナカなことを言つて、世の中からお轉婆とか生意氣とかど攻撃せられるので遠慮して態どさし控へられて居るのかも知れぬが、今日の社會は、もはや、それはども、度量が少

さくないのである、また實際自身に關係したとであるから其希望なり抱負なりを述べるは至當のことで誰に遠慮もないことでないか。男子の教育が進んで女子の教育がいつでも後廻しになるのは、種々の事情があるには違ないが、一は婦人たちが此方面について述べる所が、まことに少いのに原由するのだと考へる。とは何所かで誰かゝら聞いた談話の斷片である。



彙報

新刊紹介

○實用小教育學 女子高等師範學校教授齋藤鹿三郎君著 山海堂發行
本書は地方師範學校女子部、高等女學校補修科、其他准教員養成の目的を以て、著述せられたるものにして、僅々百六十九ページの小冊子に過ぎざれども、よく其省繁適要の法を得たるものなるべし。其目次の大要左の如し。

第一章 序論 自一七
第二章 教育の目的 至一七
第三章

教育の區分 自一二 第四章 教育の方法 自一〇四 九甲教授法、乙訓
至一九

練法。第五章 國民義務教育の學校 自一〇四
至一九九

紙質印刷體裁も宜しく、且、所々上欄に學語の解釋を施さされたるが如き、注意至れりといふべし。定價四十五錢

○家事教本 塚本は子君著 金港堂發行

本書は高等女學校、女子師範學校其他の女學校の家事教科書に當てんが爲、新に著述せられたるもの、著者が斯道に熟達せられたる、世既に定評あり、未だ精讀の違あらざれども、一見したる處では從來のに比して遙に優良なるが如し。大體の目次は以て其内容の如何を知るに足らん。

第一章 家内の平和、第二章 一家の經濟 第三章 家族の健全

第四章 交誼の圓滿 第五章 育児法

等にして、更に一章を數節に別ち、紙數凡二百七十八頁、殊に附録として二十餘頁の日用食品分析及簿記表を添へられたるは、最重要なるべし。吾人は、單に學生の教科書としてのみならず、一般家庭に於ても、此の如き書籍の、是非備へられんことを望む。定價七十五錢

○簡易日本小文典 國語研究組合編纂 賣捌所金昌堂

一册八十六頁の小冊子、題號の示すが如く、初學者の文典を學ぶ階梯として、殊に尋常小學校、准教員講習用、高等女學校生徒用、中學校初年生徒用の爲めに編纂せられたるもの、記述簡明殊に各節の後に練習題を掲げ卷末には動詞、助動詞、關係詞等の一覽表を附し、且つ文例は悉く現今の讀本地理理科修身等の書物より取りたる、注意頗周到なり。卷首に

は本居豐頓氏の眞筆の和歌を銅版に附せり。初學者の文法を學ぶには最便利なるべし。

○家庭 第一號 山城國紀伊郡 東九條村烏丸

大日本佛教婦人會發行

本年一月發刊に於ける佛教主義の家庭雜誌なり。

○第三才媛詞藻 東洋社發行 女子の友第八十二號の臨時増刊紙數百六十八、他に附録三十六、定價二十錢。

○女子の友 第八十三號 東洋社發行。

寺田勇吉氏の「女服改良に關し貴婦人及女教師諸君に告ぐる」論文あり、縣師範學校長の「女子教育と舅姑」は將來女子には是非とも舅姑に事ふべきものとの精神を持たしむるを以て女子教育の方針の一とせざるべからざるを論ぜり。

○教員文庫 第一篇第一號 帝國通信講習會發行

一種の議義錄にして高島氏の教育學、内藤氏の教授法、松本氏の兒童研究、福來氏の心理學あり、卷首の教育叢談一寸面白し、初等者の獨學に最便なるべし。

○教員實驗界 第七卷第一號 育成會發行

白井規矩郎氏の英國新式の體操、安井哲子氏の英國小學校狀況其他兒童の病勢と矯正法等例に依りて記事豐富殊に新年大附録としてウエリトン公イートン小學校に臨む圖を添えたり。

○衛生唱歌 三島 通良作歌 集英堂藏版
鈴木米次郎作曲

道德歴史地理等に關する唱歌は從來既に夥多なるに反し未だ一の衛生

に關する唱歌の出でざるを遺憾とせられて今回特に出版せられたるもの著者の言ふ如く歌としては華美優雅の字句乏しけれども日々之を唱するに至らば其實益極めて大なるべし。定價七錢

○女子大學 校舍寄宿舎の建築等も愈成就すべきを以て、來る四月より開校の運に至るべく差し向き、家政國文英文の三學部第一年級に百五十名の生徒を募集し五ケ年の高等女學校、師範學校及四ケ年の高等女學校卒業後一ケ年を補修科を修めたる者は無試験入學を許し、尙附屬高等女學校には第一學年より第五學年に至る各年級に都合三百五十名の生徒を入學せしむべしと云ふ。

○女子高等師範學校入學試験問題

國語試験問題 (二時間)

(注意) 文法の答と解釋の答とは別紙に認むべし

○文法

第一 左の文字に訓讀の假名を附してその活用を示せ

終 倒 敬 縛 危

第二 左の句中圈點を附したる語はいかなる品詞に屬するか

いひて善友に交らなむ

第三 左の文中語法の誤を訂正せよ

汝は友を訪ふて何を話せしや

○解釋

第一 嗚呼妙なるかな寫眞の術昔より和漢丹青に名を得たる者の筆といへども千態萬狀寸楮にをさめてかくまで纖緻なるを見ず誠に非情の鏡面を以て有情の景象を貽すこと千古未發の奇觀といふべし

第二 六波羅の入道しづき給ふ御女内に奉らむとてこゝらいそぎ給ひけり此の頃院の御子の御定にて參り給ふといいかめしきひびきにてげはいことためたく女房などもなめなるなくえらびといのへられてあまたさぶらふ

作文

友の擇ぶべき事を述べ

(右漢字交り普通文に記述すべし)

歴史試験問題

(三時間)

第一 我が國武門政治の沿革を略敘すべし

第二 左記の人々の略傳を問ふ

伊勢 大輔 貝原 益軒

第三 清朝康熙帝の事業を述べよ

第四 歐洲中世末海上發見の影響如何

第五 ウキナンナ列國會議後に於けるフランス國政治上の變遷を簡單に述べよ

漢文試験問題

(二時間)

每字の傍に讀方の假名を付け別紙に意義を解釋すべし

第一 諸侯皆朝于江戶。賜第邸于郭内。商賈日益豐集。坊肆年增。都下方四里。屋舍鱗次。御比。至有土一升金一升之謬。

第二 越王勾踐之伐吳。客有獻醇酒一器。王使人注江之上流。使士

卒飲其下流。味不及加美。而士卒戰自五也。

第三 肉祖貢荊。刳頸之交。

理科試驗問題

(三時間)

(注意) 物理、化學、博物の答は各別紙に認むべし

○物 理

第一 やまびこ(反響)は如何なる場合に於て聞き得べきや

第二 流動電氣を生起するには如何なるものを以てするや

○化 學

第一 水は二種の成分より成ることを證せよ

第二 火焰に就て次の諸問に答ふべし

(イ) 火焰の生ずる理由 (ロ) 其光輝の有無は何によるか

火焰の構造

○博 物

第一 如何なる植物にても曾て自ら實驗せる一花の圖を描きて之に其

各部の名稱を記せよ

第二 莖と根との互に相異なる諸點を記せ

第三 血管系統及び神經系統の配置に關して高等動物と下等動物とは

如何なる相違あるか

第四 人の食管に注入せらるる消化液の種類及び各種の異なる効用を

記せ

數學試驗問題

(三時間)

第一 ふり小なる數を表示するに分數を用ふると小數を用ふるとの

利害を詳にせよ

第二 二數の積を算出したる後此積が正しきや否やを驗めず方法に就

きて知れる所を記せ

第三 八月後拂の手形の二百十圓に對し若干金を拂ひしを以て殘金に

更に六ヶ月を経て支拂ふも可なりと云ふ此若干金とは幾圓なる

か

第四 次の式の値を算出せよ

$$\left(\frac{1}{7} + \frac{5}{12} - \frac{1}{9} - \frac{1}{11}\right) + \left(\frac{17}{36} + \frac{9}{22}\right)$$

第五 マリーよりリヨンまでの汽車賃は五十六フランクトにして距離

は五百六軒キロメートルなり今八軒を五哩とし五「フランク」を二圓とすれば

一哩に付き幾錢の賃金と成るか

第六 三角形の地面あり其底邊は一千八百二十九米突にして高さは七

百三十六米突なり此地面の廣さは何町何反何畝何歩なりや

第七 與へられたる半徑の圓周を與へられたる角の二ツの邊に切する

線に作る方法並に其理由を問ふ

(注意) 第四に就きては運算を詳記し第三、第五、第六、に就きては

解法、算式、運算、答を明記すべし

習字試驗問題

(一時間)

第一 文行忠信

右楷行二體

第二 和歌の浦にしほみちくればいたをなみあしへをさしてたつなき

わたる

圖書試驗問題

(一時間)

毛筆畫

第一 墨畫の梅

第二 墨畫の花弁

右二圖隨意に畫くべし

裁縫試驗問題

(三時間)

第一 幅一尺二寸の縮緬を以て衣服無垢一枚を裁つに寸法は身の丈四尺とし其他も普通にせば用布の總丈幾許を要するか。(裏地は省く)

右裁ち方の圖解に名稱寸法を記し及び其縫り方の算式を示せ
第二 與ふる所の布と糸とを用ゐて男袴羽織の左の前身頃を縫ふべし
右の寸法は實物二分の一とす



岡山孤兒院 石井十次氏の設立に係る岡山孤兒院は

目下二百七十人の兒童を收容して自立の方法を授け居り衣服改良の爲めには少年音楽隊を組織して全國に寄附金を募りしが尙ほ入院申込者續々あるに付當春よりは進んで擴張方法を講ずといふ。

西村茂樹氏の道德講義 夙に道德振興に熱心なる同

氏は其講ずる所を道德講義と題して既に六卷まで世に公にせしが今回更に七八二卷を出すよし

○玩具の發賣差止 玩具品中土燒の鳩犬張子の二品は有害の色料を試用しあるを發見したれば今回警視廳より發賣を差止めたり

○保姆傳習所講師及場所 東京府教育會の附屬同所は、愈、本月より開始することとなり中村五六氏を同所長に、東基吉氏、清水鶴子氏、山内繁雄氏、東彘子氏等を、夫れ、講師に依頼せりと云ふ。尙場所は當分東京府第一高等女學校に定めたりとのことなり。

海外彙報

○英國女皇陛下の崩御 吾人はこゝに表題の如き悲しむべき報告に接したり。我國とは特に親交厚き國土に臨御あらせられたる女皇陛下我世界女界の親友なりし

女陛下には遂に、一月廿二日午後六時四十五分を以て崩御あらせらる。嗚呼悲いかな。女皇陛下は實に千八百十九年の御誕生にて本年八十三歳に渡らせられハノバ一家中にても、最も高齡を保たれたる御方にて、ジョージ二世は七十七歳ウキリヤム四世は七十二歳の高齡に達せられたるも未だ女皇の寶算に及ばざると遠し而して女皇の御宇六十三年の久しきに亘れるが如きは英國の歴史中絶えて其の比類を見ることなし此の間に英國國力の發達したること領土の擴大したること文物の煥發したると其他萬般の事物の進歩發達したること思れ亦他の朝に其比を見ざる所たり。然るに近年内外多端にして痛く宸襟を惱ませられたるが上に、昨年第二皇子エデンボルグ公の薨去に遇ひて深く哀痛せられてより健康を害ひ給ひたること尠からざれば内外共に御氣遣ひ申上げたるに、遂に此悲報に接したり御病勢は去十九日頃より甚だ容易ならずして大に衰弱を來し體力減損して、大脳萎縮の兆候ありしが二十一日に至り愈

愈危篤に瀕せられ、御臨終の期も頗る切迫したる御模様なれば、皇室の一族を病床に召させられ、御永訣ありたりと承はりしが、御療養甲斐なく遂に此報を得るに至りしなりいたましいかな。

○英國新帝即位及皇太子宣下 女皇ヅキクトリア陛下崩御後英國憲法の規定に依り直にウエールス親王殿下踐祚大不列顛、愛蘭聯合王國兼印度皇帝エドワード第七世陛下と稱し奉り皇太孫ヨーク公に皇太子殿下の宣下ありウエールス親王と號し奉る由

○韓國釜山教育事情 海外に於ける我邦人の教育事業に關しては、政府も關係する所なければ、有力達見の教育家もあるなく、従つて随分亂暴なる有様なり。韓國の如きは殊に、世界列國環視の中心點たるに、我邦人の手にある教育事業の然く亂暴なるは、まことに慨歎の至なりと云ふ外なし。

釜山にある我居留民の數、凡八千、此人口より徴收する所の公共費額、凡八千九百圓、而して教育費は、

其十分一を占め、他の主なる費途は、土木水道費とす。小學校の數一、幼稚園を之に附屬す。幼稚園は東宮御慶事記念として昨年創立せし所にして、目下本派本願寺の主持する所なれども、今回は、之を學校に移さんとするなり。生徒幼兒の數合せて、四百五十人、中西洋人二十人計、教師の數二十人、俸級、最高六十圓最下二十圓なれども本年よりは最高八十圓(校長)に増額せんとす、此他に若干の手當金、住宅料を給せらる。

釜山に於ける生活費は割合に廉にして、魚類も鶏も多ければ朝鮮米といへども、味は殆ど日本米と異ならず、故に食料品は極めて廉にして、只、住宅料は稍高價なるのみ、氣候は畧、東京と同じ。右の如くなるを以て、従來は學校教員も、眞實熱心に教育に従事するものなく俸給も比較的宜しきを以て、之を以て高利貸などなせるものすらありしなり。

然れども本年よりは、學校を新築し、更に國庫の補助

を得て教育の俸給等も増額し大に有力の教師を聘して面目を改めんと着々運動中なり。小學校の他に、日本語學校ありて、こゝには韓人の子弟を日本語にて教育しつゝあり、目下生徒數七八十人に及べりといふ。

會報

本年一月二十二日午後三時女子高等師範學校附屬幼稚園に於て幹事會を開き左の件を議決せり

- 一、雜誌發行に關する出納は特別會計となすこと
- 一、二月の常會の後に會員野口ゆか子氏の送別會を開くこと

フレベル會第廿常會記事

明治三十四年二月二日午後一時半より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會高浦丈雄君の演說あり終て幹事野口ゆか子氏の送別あり尙詳細は次號に記すべし

寄附金

此度本會より雜誌發行につき會員日本橋區養徳幼稚園
保姆相賀よし子氏より金五圓寄附せられたり

入會

女子高等師範學校
埼玉縣高等女學校

新潟縣高田高等女學校

岩川ひき

富岡龜門

吉村はま

津原ちか

中原ふく

退會

乙骨千代

謹告

安井てつ子氏の英國幼稚園狀況、記事の都合によりて
次號に掲載すること、せり。尙本紙第一號に掲載すべ
かりし細川潤次郎氏の論文は同君の公務多忙なるより
未だ掲載の榮を得るに至らず、何れ近刊の分に於て掲
載すべし乞ふ并せて諒せられよ。



次號豫告

三月五日發行

口繪 英國故女皇、ビクトリア陛下、同新帝エドワード

七世陛下、同皇后陛下、御眞影

子ども 半太の話、福引、猿の人眞似

家庭 兒母里ソーダン 東京盲啞學校長 小西信八

印度土人の家庭生活 Y. I. 女

學術 理科實驗 高等師範學校助教諭 關本幸太郎

書法談片 女子高等師範學校講師 森川 清

史傳 故英國女皇、ビクトリア陛下の詳傳 鄭 越 生

ローランド夫人 全 人

藤田東湖の妻里子 女子高等師範學校教授 下村三四吉

文苑 車のわだち 擊 水 生

妻の寶 東 くらめ子

和歌數首

講義 育兒學 女子高等師範學校教授 中村五六

說林 兒童訓練論 女子高等師範學校教授 黒田定治

幼稚園發達の方法 全教授附屬小學校主事 高浦丈雄

女子の職分 單 念 士

研究 臺灣の古談 女子高等師範學校教授 町田則文

倫理管見 高等師範學校研究科 石井國次

圖書教授につきて 女子高等師範學校助教諭 東 基 吉

盛岡地方の俗謠 陸中盛岡 山村材美

紀州新宮の手毬歌(樂譜附) 記 者

英國幼稚園の狀況 女子高等師範學校教授 安井てつ

米國に於ける兒童研究 牧 羊 生

雜錄 數件

此廣告依御注文の御方は婦人といふを御附記を乞ふ

關根正直先生校閱 杉山文悟君 共編

増訂二版
國語文通釋

全一冊 定價金四拾錢 郵稅金貳錢

本書は日本歴史を修むる者殊に之が檢定試験受験及斯道の開闢者の便に供せんが爲めに編纂したるものにして各項に收めし事柄は左の如し

- (一) **人名** (又は) 古來歴史上に顯はるる人名(又は神名)を列擧し正確の讀書を示し其事跡を摘記す
 - (二) **地名** 古戰場及城柵を擧げ其所在地を示し且歴史上如何なる事ありしかを記す其他歴史上に關係ある地名
 - (三) **政治法律** 官職、位階、俸祿、貨幣、其他諸制度法令等を擧ぐ
 - (四) **風俗** 家屋、飲食衣服及冠婚葬祭に關する事項其他種々の遊戲
 - (五) **學問** 古來著名の書籍の解題、漢學、私學及現時の諸學校の起原沿革
 - (六) **美術工藝** 繪畫、彫刻に關する事項、織物、染物、樂器其他廣く美術工藝に關する事項
 - (七) **宗教** 神社、佛閣、宗教の諸宗、派、宗教上の祭禮等
 - (八) **雜** 前七項の何れにも定め難きもの及其何れにも屬せざるものを擧ぐ
- 以て本書が如何に必要有益の書なるかを知らしむるを一本を備へて其の眞價を試みられよ

東京市日本橋區本石町三丁目

發兌

金昌堂

杉山辰之助
(電話本局九百五十八番)

東京侍講本居豐顯先生題詠 國語院講師逸見伸三郎先生校閱 國語研究組合編纂

新編 **日本小文典**

全一冊 定價金參拾六錢(郵稅共)

本書極メテ教育的ニ 文法及假字遣等ハ初歩ヲ記述シ 其例題及

練習題ハ總テ小中學讀本、又ハ修身地理歴史理科等ヨリ採擧シテ 初學ノ了解ニ

便ニシ、尙新定字音假名遣チモ添ヘ 中學校、

高等女學校生徒用 ● 高等小學校國

語教授用ニ適切ナルハ勿論師範學

校入學者ノ自修用トシテ亦極メテ

適切ナリ。

東京市本郷區森川町一番地

發行所 帝國通信講習會

大賣捌所 金昌堂

(後付の二)

東京尋常師範學校教諭
兼附屬小學主事

立柄教俊君校閱

國語研究會編

文部省令 訂正
準 據 再版

國語綴方教授書

全一冊 和裝製美本
定價 金參拾八錢
郵稅 金六錢

(後付の二)

一本書は改正小學校令並同施行規則に據り尋常小學校國語科綴方の教授并參考書として編輯したるものなり

一本書は用ひたる假名、字音假名遣ひ及漢字は總て小學校令施行規則に據れり

一本書は編を分ちて教授法編及教材編の二とす

一本書教授法編に於ては綴方教授の目的、綴方教授に關する許多の必要なる注意及綴方教授の方法十數種等を列舉して最も懇切に叮嚀に説述せり

一本書教材編に於ては第一學年より第四學年に至る各其程度に應じ序次を正し讀方教授に伴ひて教授すべき單語短句文法等之を應用して綴らしむべき文章の泉源文例とを分ちて教授の材料を蒐輯せり而して其蒐輯したる材料は頗る兒童に適切にして興味あり且頗る豊富なれば直に採りて以て教授草案に代ふることを得べし

一本書書翰文は候文體を採れり然れども文章は極めて平易卑近にして言語に接近せしめ兒童に解し難き用語は之々使用せざるは蓋し時勢に適したるものと謂ふべし

一本書は附録として小學校令施行規則の第一號表第二號表及第三號表の漢字索引表を添へ以て教師の參考に便にせり

一本書は教育實驗家諸氏の團體たる國語研究會の編輯に係り東京府師範學校附屬小學校主事立柄君の綿密なる校閱を経たるものなれば其價值あるや固より言を俟たざる所なり

●教育實驗家批評 本書は國語綴り方教授の注意とその教材とを舉げたるものにして尋常小學四學年まで名詞接續詞、代名詞、形容詞、副詞等の各種の練習と尋常小學後半期より候文を課すること、し三學年にては候文の候申し候、をる候、かく候、下され候、御、候、届、伺を教へ四學年にては之を用ひて各種の場合の事節を綴ること、し電信文の外二號表三號表を附録とし和裝百七十八頁あり學校教員の好參考書なり

發行書肆

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地(電話本局九百五十八番)

金 昌 堂

矢澤米一高印君校 帝國通信講習會編

理科 動物圖

綴一第 縱二尺二寸六分 幅二尺二寸
 木圖ハ犬猫牛馬鶏禁止鳥鴨鵝蛙
 蛇鯉鯛ノ類十葉ニテ
 定價 金壹圓五拾錢
 說明書 金拾錢

理科 植物圖

綴一第 縱二尺二寸六分 幅二尺二寸
 本圖ハ梅櫻薔薔蒲公英麥豌豆松
 百合胡瓜栗等ノ十葉ニテ
 定價 金壹圓五拾錢
 說明書 金拾錢

午澤米三郎先生撰 植物圖第一 綴出來 及ハ種子植物の生作用の拾葉定價金壹圓五拾錢說明書冊金十錢

師範教育學會編

明治三十三年 師範學校 中學學校 高等女學校

教員檢定試驗問題答解

全 壹 冊
 定價金六拾八錢
 郵稅金六錢

本書は受験者の研究に利益を與へ可成多くの及第者を出し以て師範教育の施設を補助せんが爲め師範教育學會自ら起稿の任に當り斯學専門の大家親しく校閱の勞を執られたるものなれば其解明の正確なるは勿論答案として亦能く其肯綮を得たり故に本書は常に受験者のみならず一般斯學研究者に取りても實に懇切なる良師たるべきを信す斯學に志あるの士速に一本を購ひ本書が坊間普通の此種の書と其趣を異にする所あるを知られよ

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金 昌 堂

大日本
女學會
機關雜誌



月刊

第壹號

(既に發行せり)

定價金拾五錢

全國無遞送料

(後付の四)

梨本宮妃殿下御肖像 近衛公爵令夫人染筆

〔論說〕

●結婚の方法につきて鳩山春子 ●外國人の腦裏に映する日本婦人

〔學藝〕

●科學大意島村瀧太郎 ●理科問答朝夷六郎 ●源語研究法梅澤和軒 ●漢書解題丸井圭次郎 ●美術一般紀淑雄 ●本邦女子服裝の沿革下田歌子 ●文章添削批評今泉定介 ●作

歌批評大口鯛二

〔修身〕

●公德の養成積積陳重 ●女子の務佐方鎮子

〔齊家〕

●看病後閑菊野子 ●割烹石井泰次郎 ●泰西禮法津田梅子

〔世務〕

●法律の

話岡戸諭介 ●經濟談伊藤秋南

〔譚紳〕

●福さがし湖山人 ●丑太郎の德稚松生

〔詞藻〕

●歌御會始御前披講の歌 ●同十二殿下及十六女官詠進歌 ●會員詞藻

〔雜報〕

●俗地

理談喜田貞吉 ●床の間飾心得伯爵松浦詮

〔時事〕

●二十世紀の列國大勢

〔彙報〕

●内外重要事項數十件

(貳號以下毎月二十五日發行)

發行所

東京市麴町區土手三番町

大日本女學會

大賣捌所

東京市神田區表神保町

東京堂

高等師範學校教授大瀨甚太郎先生
山口縣德山中學校校長杉山富樫先生 共譯

兒童教育法

全一册

定價金七拾錢

郵税金八錢

本書は獨逸國有名の教育家オーフェルベルグ氏の著書中所說の新且剴切なるを以て最も好評を得たる「學校の合法的教授に關する示教」を大瀨、杉山兩文學士が極めて平易簡潔に譯述せられたるものなれば教育家諸君の座右に缺くべからざる良書なり

農學士 齋藤祥三郎先生編

●文部省檢定済

英文法會話作文

全册 前篇定價金六拾五錢
郵稅金八錢
二册 後篇定價金六拾錢
郵稅金八錢

本書は中學校及高等女學校二年生以上の教科用書に充つるの目的に出で文法の初歩を授けると共に會話及び作文の力を養成せんことを旨としたるものなれば教科用適當の良書なり

發行所

東京日本橋區通三丁目

成美堂

